
君の住む空のカタチ

タカユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の住む空のカタチ

【Nコード】

N1068T

【作者名】

タカユキ

【あらすじ】

高校1年生のある日、俺は彼女に出会った。

身長145センチのちっちゃな生意気なその女は、ある日俺の大切な女になった。

そしてある日、彼女は俺の女神になった。

彼女は俺に宿題を残していった。

なかなかの難問だ。

答えを見つげるために、俺は人生を彷徨う。

そんな俺と彼女のお話。

この物語はフィクションです。
作中の人物および団体名他は実在しません。

1

9月の海はきらきらと輝いていた。

一月ほど前まではここも海水浴客で賑わっていただろう。

鎌倉の由比ヶ浜。なにより観光地の海であるが、賑わいも去り、台風も過ぎ、今は穏やかな波が打ち寄せている。

平日であることもあってか、周りに人の賑わいはない。

あまりに波が穏やかなので、サーファーもない。

一組の家族連れが波打ち際で遊び、一組のカップルが少し先を腕を組んで歩いている。

沖には二隻ほどの貨物船が通り過ぎるのが見え、それを目指していくかのようにカモメが飛んでいく。

空は雲一つ無く、海面を太陽の光が照らし、潮の香りが今は心地良い。

「美帆！久しぶりだな。」

俺は砂浜の真ん中の流木に腰掛けて語りかけた。
答えるかのようにカモメの鳴き声が聞こえてくる。

「やっとここに来了たよ。10年掛かったけどな。おかげで俺、26歳になっちまった。」

すごく穏やかな時間の流れを感じながら、俺は言葉を続けた。

「美帆に出された問題、やっと答えが出たよ。」

海面の光の輝きが美帆の微笑みのように思えた。

「君も喜んでくれるの？」

ふと風が吹いて、俺の頬をすり抜けた。

「答えを伝えに来た。でももう少しこのままでもいいな。」

吹き抜ける風はまだ優しかった。

2

俺は進学校に入学した。

中学時代は受験勉強に必死に取り組んだ。

おかげで県下でもトップレベルの高校に入学できた。

そこからが悪かった。

燃え尽き症候群とでも言うのだろうか。

何もやる気が起きない。

試しにブラバンに入部してみた。

面白くない。

勉強？

全然やる気が起きない。

何より学校が遠かった。

片道2時間。遠過ぎるだろ。

学校は指定の詰め襟だったが、反抗して上着は私服。

そりゃあ教師には怒られたけど無視。

だんだん教師も何も言わなくなった。

なぜか自由な校風で、規則はあっても罰則が無かった。

そんなこんなでだんだんグレていたんだろうか。

学校に行く振りして途中下車してゲーセンで遊んだり、足を延ばして観光地をぶらついた。

たまに学校行っても授業を抜け出して学食でメシ食ったり裏山でタバコ吸ってた。

学校が終わると近くの、夜はバーになる喫茶店で堂々と酒飲んで、酔っぱらって電車乗って帰った。

適度に留年しないように出席日数を調整しながら遊んでた。

電車も地方独特の、ある駅を過ぎると喫煙可能な車両があった。堂々とタバコ吸ってた。

そんなふざけた高校生活1年目も2ヶ月が過ぎて、梅雨入り前だがジメジメした日だった。

「コラ！あなた高校生でしょ？」

いつものように電車でタバコを吸おうとして取り出したタバコを取り上げられた。

「あ？」

睨み上げると、そこには女が立っていた。

サラサラのロングヘアー。

結構、いやかなり可愛い。

しかしそんなことを考えてる場合ではない。

「なんだおまえ？」

立ち上がってその女と対峙する。

意外と小さいな。

173センチの俺の顎の下くらいに頭のとっぺんがある。

見下ろす俺の鼻先にタバコの箱を突き出した。

「ここ読める？未成年者は吸っちゃいけないって書いてあるでしょ！」

なんかカチンときた。

「おまえに関係ないだろ！」

タバコを取り返そうとしたが、さっと引っ込められた。

電車は駅のホームに入っていた。

「とにかくダメなんだからね。」

その女はそのまま電車から降りて行った。
そのまま取り残される俺。

なんか周りの視線がやけに突き刺さる。

「なんなんだよ……。」

俺はそのまままた席に座った。

やってらんねえ。

このまままた観光地巡りでもするかな。

駅弁食って帰ろう。

そう思った瞬間、雨が降り出した。

「マジかよ……。」

いつも朝に乗る電車は同じだった。

なにせ地方の電車。

本数が少ないから1本前だと1時間早く着くし、1本後だと遅刻だ。

次の日から気が付いたのだが、あの生意気な女も同じ電車だった。
いい女であることは間違いない。

なんか気になって目をやると、やはり可愛い。

しかしたまに目が合うとニツコリ笑いやがる。

どういう神経してんだ？

ただ、あの日以来途中下車する事は無くなった。

毎日彼女を見たくなくなったのかもしれない。

電車ではタバコは吸わなくなった。

相変わらず裏山や喫茶店では吸ってたけど……。

「やめて！」

そんな出会いから1週間ほど経った頃。

彼女の方から声が聞こえた。

ふと見ると、なんかガラの悪い3人組に囲まれてた。

「なあ、このまま俺らと遊びに行こうぜ！」

よく見ると、同じ路線の評判の悪い某高校の生徒だった。
見覚えあるな。

ああ、よくどこ高校の誰をシメただの、あそこの高校はもう舎弟だ
だのとデッカい声で喚いてた連中だ。
タチの悪いのに捕まったな。

「前からあんたに惚れちゃったんだよ、俺。」

3人の中の頭の奴がデカイ声で喚いてた。
ちょうど電車がホームに止まった。

「さあ、行こうぜ！」

「やめてください。」

彼女は拒否するが、腕を捕まれて連れて行かれそうになる。
なんだよ、周りは見て見ぬ振りか・・・。

とうとう電車から降ろされた彼女を見て、仕方なく俺も電車を降り
た。

電車が発車した。

彼女は3人組に囲まれて連れて行かれそうになるのを必死にこらえ
ていた。

しょうがねえなあ。

まあ、腕に覚えが無いわけでもないし、このまま連れ去られちゃう
のも気に食わないし。

「おい！」

振り向く3人、いや4人。

彼女はビククリした顔してる。結構面白い。

「なんだてめえ。」

一番下っ端っぽい奴だ。

だいたいこういう奴が一番虚勢張るんだよな。

「悪いけど、それ俺の女なんだ。離してくれる？」

「はあ？」

3人組は怪訝そうな顔してたが、彼女はもっとビククリした顔になった。

まあ許せ。

「そーゆー事だから離してくんない？」

「おい、女離すんじゃねえぞ。」

そう言っって一番偉そうなのが俺に近寄ってきた。

「関係ねえよ。俺が目をつけた女は俺のモンだ。」

相変わらず頭の悪い受け答えだ。

「馬鹿の言う台詞だな。」

ボソッと呟いた瞬間に殴り掛かってきた。

仕方ねえな。1発殴らせとかなないと正当防衛になんないし。

グーパンチが俺の顔に当たる瞬間軽く首をひねった。

こうするとあんまり痛くないんだよね。

ちよっとわざとらしく転んでみた。

ただ、ちよっと計算がズレたらしい。

口の中に血の味が広がった。

どうもひねりが甘かったらしい。

奴は調子に乗って俺の髪を掴んで引きずり起こし、俺の顔を目掛けて膝を蹴り上げてきた。

限界突破。

その膝めがけて肘を打ち下ろした。

「グッ！」

声にならない呻きが漏れた。

崩れそうになる奴の腹に立ち上がり様脛蹴りを一発。

見事にみぞおちに決まった。

崩れ落ちた奴の襟を掴んで立たせたところで、おでこに頭突き。もんどりうって倒れる。

そのまま体を丸めて悶絶してる男を見て、ほかの二人がいきり立つ。

「てめえ！」

「悪いな。俺、中国拳法の免許皆伝なんだ。通信教育だけど。」

冗談だ。まあ喧嘩には自信あったけど。

でもあの二人には冗談を楽しむ心のゆとりが無かったらしい。気が短い奴らだ。

同時に殴り掛かってきた。

まあしょうがない。

軽くたたんじまうか。

そう思った瞬間に二人組はねじ伏せられていた。

「へ？」

おまわりさん。出来るならもっと早く来てください。

3人組と彼女と俺はそのまま駅の鉄道警察隊の詰め所へ連れて行かれた。

彼女と目撃者の証言で一応無罪放免ではあった俺だったが、結構こつてり絞られた。

やれやれ。今日はこのまま旅に出るかなと思いつながら詰め所を出ると、正面の壁にもたれるように彼女が立っていた。

「よ！」

軽く手を挙げて、俺はそのままホームへ向かった。

彼女は何も言わず、俺の少し後ろを付いてくる。

ホームの真ん中でベンチに腰掛けると、彼女も少し離れて横に座った。

「ありがとう。」

少しして彼女が言った。

「ああ。」

ちよっと照れくさかったんで、ぶっきらぼうに答えた。

「ダイジョウブ？」

彼女は俺の顔を覗き込んで聞いてきた。
すごく心配してくれていそうな表情だ。
ちよつとドキツとした。

一発殴らせたし、結構激しい頭突きしちゃったんで、額が割れて出血してたし唇の左端が切れていたので、額には包帯、口の端には絆創膏が装着されていた。

「あ、ああ、ダイジョウブ。」

少し間が空いて、彼女がクスリと笑った。

「ん？」

「通信教育の免許皆伝って……。」

そのままクスクス笑い続けた。

今になって彼女の笑いのツボにヒットしたらしい。

「冗談に決まってるんだろ。」

目の前に電車が入ってきた。

「今日学校行く？」

彼女が聞いてきた。

「いや、さぼる！」

俺の答えを聞いて彼女はニツコリ微笑んだ。

電車の扉が開く。

彼女は立ち上がって俺の腕を引っ張り上げた。

「行こう!!」

そのまま電車の扉に向かって引っ張っていく。

「私、山崎美帆! あなたは？」

「遠山浩輝。どこ行くんだ？」

「デート!! 私の彼氏なんですよ？」

彼女はニツコリ笑って言った。

俺と美帆の物語が始まった。

3

「ヒロ！」

美帆の元気な声がする。

彼女の声は舌っ足らずで、少し鼻に掛かるハイトーンだ。俺はこの声が好きだ。

今日は付き合って10回目のデート。

とは言ってもあの日から10日目。

つまり毎日デートしてるわけだが。

今日は土曜日の学校帰り、彼女の希望で公園に来てる。

美帆の作って来た可愛いお弁当を食べ、芝生に寝っころがってる。

あの日、二人は学校をサボって、沿線のさらに先の観光地へ行った。ちょっとした高原に行き、遊歩道を歩きながらお互いの話をたくさんした。

見た目に似合わず結構強引なヤツだし、というより積極的と言った方がいいのかな。

遊歩道を散歩してるときからもう俺はヒロと呼ばれてた。

「私、入学してすぐヒロのこと見つけたよ。」

そう白状したのは3回目のデート。

「すぐタバコ吸い始めたでしょう。心配だから取り上げちゃった！」「すいません。もっと前から吸ってました……」

今は吸ってません。

どうやら、高校に通い初めてすぐに俺を見つけてくれていたらしい。でも俺はといえば、一ヶ月後には電車でタバコ吸ってたからなあ。

でも、そんなことをあんなに真っ直ぐな目で見つめながら言われたら、ますます惚れちゃうでしょう。

あなたは卑怯です！

先に惚れてくれたのは美帆だったけど、今では惚れ度合いでは間違いないく勝ってる自信がある。

痛い思いしたけど、そんなきっかけを作ってくれた3馬鹿トリオはその後同じ車両には乗ってこなかった。

感謝してるんだけど。

美帆が通う高校は県立の進学校の女子校。

俺の高校の3つ手前で降りる。

で、美帆の家は俺の乗換駅。

10駅は一緒にいられた。

学校サボりはあの日だけと約束した。

「こら！ヒロ！聞いているの？」

そんなことを考えながら目を瞑ってた俺は、いきなりお腹をパンチされた。

「イテッ！」

「人の話聞かない罰だー！」

そんなことを言いながらコロコロと笑う。

「おまえ、その暴力癖は直せよな！」

「罰でーす！」

また笑う。

「明日はどこ行くの？」

「美帆はどこ行きたいの？」

「え、連れてってくれるの？」

おいおい、行き先は？

「どこに？」

「海ー！」

おいおい、ここは海無し県の埼玉だぞ？

美帆は俺の横に座った。

「どこの？」

美帆は遠くを見つめるように言った。

「私ね、小学校卒業まで鎌倉に住んでたんだ。」

へえ、洒落たところにお住まいで。

「お父さんの転勤で埼玉に来たんだけど、週末はいつも由比ヶ浜だったんだ。」

「へえ。」

「両親がヨットやってたから。だから私の名前は美帆。」

「なんで？」

「ヨットの白い美しい帆のように、たくさんの愛情と愛を受け生きていくようにって！」

うん、美帆にはピッタリの名前だと思う。

色白で、ちょっと儚げで。

きつと両親の愛情たっぷりなんだろうな。

「でも最近全然海に行けてないから行きたい！！」

ものすごく真っ直ぐに気持ちぶつけてくるから、何も言えないじゃないか。

「わかったよ。じゃあ明日は鎌倉だ！」

そういうと、美帆は俺の顔を覗き込んだ。

「なに？」

俺が言うより早く、美帆は俺の頬にキスをした。

「ありがとう！」

そう言うと、俺の背中に背中を合わせてもたれ掛かってきた。

お口にキスはまだお預けらしいが、やばい。

また惚れた。

次の日、俺たちは鎌倉に行った。

ほとんど始発で来たのでメチャクチャ眠かったが、俺は鎌倉なんて初めてだったから、結構わくわくしてた。

美帆はそんな俺をいろんなところに連れていってくれた。

最初は鶴岡八幡宮でお参り。縁結びのお守りを買った。

それから江ノ電に乗って、美帆が住んだ家を見に行った。

鎌倉高校前駅を降りて、そのまま坂を上がっていく。

おお、よくテレビドラマに出てくる光景だ。

坂を上りきって下を見ると、坂の間からキラキラ光る海が見える。

「この景色大好きだったんだ。」

そう言いながら美帆はズンズン先に行く。

「近いの？」

「ひと駅分歩くから、もう少し。わたしんち七里ヶ浜だったから。」
歩きながら美帆が言う。

ちよっと小走りに追いかけて追いつくと、俺は美帆の手を握った。

美帆はちよっと驚いたような顔をしたが、すぐ握り返してきた。

「行こう！」

「ああ。」

だいぶ高台までやってきた。

ふと見ると、オレンジがかった壁の瀟洒な洋館に着いた。

「ここだよ！」

かなり小洒落た建物だ。

「すげ……。」

美帆は玄関に向かう。バッグから鍵を取り出して玄関を開ける。

「ちょっと前まで貸してたんだ。最近また空き家になっちゃったから。」

「へえ。」

中に入ってみると、外観に違わずお洒落な作りだ。

玄関から階段を5段ほど降りると、リビングダイニング。

家具が無い上に、部屋の一面がガラス張りになっていて、ものすごく広く感じる。

そして、すぐ目の前のベランダに出ると、そこは遮る物の無い、海を見下ろす大パノラマ。

「うわあ・・・。」

声にならない感嘆符。

海から吹き上げる風が心地よく俺たち二人にかかる。

「私が結婚したら、ここくれるんだって！」

ちよつと想像した。

このリビングのアイランドキッチンに立つ美帆と、向かい合う俺。いいなあ。

「いいね。」

思わず口にした言葉にちよつと照れた。

美帆が振り向いた。美帆も照れくさそうな表情だ。

お互い同じことを想像したらしい。

うん。やっぱり可愛い。

「さ、お客様。見学を続けますよ！」

そう言って美帆は家の中に入っただけだった。

美帆の家の見学を終え、俺たちは坂を下り、海へ向かった。

海沿いのレストランで軽くランチ。

洋風の作りだが、名物はシラス丼らしい。

これがメチャクチャ旨かった。

そのまま江ノ電には乗らず、おしゃべりをしながら海沿いを歩いた。結構距離はあったが、とても楽しい時間を過ごした。

由比ヶ浜に着いたのは5時くらいだった。

太陽は西の方にだいぶ傾いてきた。

俺たちは海岸へ下る階段に腰掛けた。

海水浴にはまだ早い、梅雨入り前のこの時期はサーファーが闊歩している。

沖にはヨットが白い帆を立てて疾走してる。

「小さい頃は、おとうさんが葉山からヨットを出して、それを私とお母さんがここからよく見てたんだ。」

「美帆は乗ったの？」

「うん。小学生になってから。ヨットって言っても乗員二人までのディンギーっていうヨットだったから、よく海に落ちたけど。」

笑いながら話す美帆はヨットがよく似合いそうだった。

話している内に、太陽はどんどん西に傾いて大きくなっていく。

周りは夕焼け色に染まっていった。

「ね、ヒロ！」

「うん？」

見ると、美帆の瞳は夕焼け色に染まってキラキラと輝いていた。

黙って顔を近づけると、美帆は目を閉じた。

俺たちは初めてキスをした。

たぶんそんなに長くはなかったと思うけど、ものすごく長く感じた。

よく小説とかで読んでた通りだなと変な感心をした。

顔を離れた後、少し間をあけてから美帆は目を開けた。

「私の夢見てた通りのファーストキス、ありがと！」

美帆はまた、今度は俺の頬にキスをした。

俺はこの時思った。

美帆を死ぬまで大切にしようって。

でも、その時、まさかあんな事になるなんて俺は思いもしなかった。

「なんか最近美帆がすごく明るいんだけど、気付いた？」
由美子は公一に話しかけた。

どうやら3ヶ月前に美帆に彼氏が出来たらしい。

おかげで夏休みは毎日のように出かけていた。

由美子は母として嬉しかったが、かたや公一は父親として複雑だった。

「まあ、ね。」

ちよつと不機嫌そうな公一の態度に由美子は笑った。

「あら、美帆に早く彼氏連れてこいって言ってたじゃない。」

由美子に笑われて少し不機嫌な公一は、それを隠すように新聞を広げた。

「美帆は？」

「朝シャン中。」

公一の空いたカップにコーヒーを注ぎながら答えた。

今日からお彼岸の連休で、公一の実家の神戸に3日間帰省することになっていた。

向こうへ行ったら美帆とデートの約束をしていたのだが、出掛けにそんな話をされて多少虫の居所がよくなかった。

「まあ、しっかりした相手ならいいんだがな。」

咳払いをひとつして、公一は言った。

かなり虚勢を張ってるようだ。

「いい子みたいよ？」

「知ってるのか？」

「毎晩美帆とはお話するもの。」

自分は蚊帳の外かとなおさら公一は不機嫌になる。

「仕方ないじゃない。あなたは美帆の寝る前に帰ってこないんだから。」

それはそうだが、小さい頃には「パパと結婚する!」と言ってた娘だ。

面白いはずがない。

そんな公一に追い打ちを掛けるように

「いいじゃない。美帆ったらすごく幸せそうよ。彼の話をする時なんか特に!」

なおさら面白くない。

ムスツとしながらコーヒーを口に運ぶと、美帆がリビングにやってくる。

「テストはどうだったんだ?」

「大丈夫ですよ! 私、優等生ですから!」

髪の毛をタオルで拭きながら、美帆が得意げに答えた。

いつもながらよく出来た娘だ。

そんな可愛い自慢の娘が、自分だけ知らない男と交際していることに多少苛立ってくる。

「ねえ、お父さん。神戸はどこでデートするの?」

「ん? うーん、それはだな・・・」

不意を突かれて狼狽えた。

そんな二人を見て由美子がクスツと笑う。

それを見て。公一は意を決したように美帆に聞いた。

「美帆。彼氏が出来たってお母さんから聞いたぞ!」

美帆はムスツとした顔で由美子に食ってかかる。

「お母さん、まだ内緒って言ったじゃない!」

「あ、忘れてた。」

「もーっ!」

「ゴメンゴメン。」

由美子はふくれっ面の美帆の頬を突っついた。

美帆はそのままくると公一の方を向くと

「別にお父さんにだけ黙ってたわけじゃないよ。デートの時にちゃんとお話ししようと思ってたんだ。」

公一は由美子にコーヒーのおかわりを促しながら

「名前は？」

「遠山浩輝くん。ヒロって呼んでる。」

「年は？」

「同い年。」

「いい男なのか？」

「うん。かっこいいよ。男らしいもん。」

「どんなヤツだ？」

「私を守ってくれる、お父さんみたいに強い人！」

「それで・・・」

美帆が立ち上がって質問を遮った。

「続きはデートの時！ね！」

公一は自分から可愛い娘を奪おうとするその男に少し興味を抱きだした。

それを見つめながら、由美子はしてやったりという表情で頷いていた。

公一はそんな由美子を見て、わが妻は策士だと悟った。

時計を見上げ

「さあ、そろそろ出発しないと間に合わないぞ！」

「きゃー、待ってー！」

美帆が慌てて自分の部屋に支度に向かった。

東京駅に向かい、新幹線で神戸に向かう。

今日は山崎家親族一同が集まり、おそらく大宴会だろう。

グリーン車の中程に家族三人が向かい合って座った。

東京駅で買った駅弁を仲良く食べ回しながら楽しい道中だった。

「おい、美帆。どこ行くんだ？」

立ち上がる美帆に公一が問いかける。

「トイレ！レディーにそんなこと言わせないでよ。」

「さっき行ったばかりじゃないか。」

「なんかトイレが近いんだもん。」

由美子がたしなめるように

「さつきから美帆はジュース飲み過ぎなのよ。」

「お腹もちよっと張り気味なのよね。」

まだまだ子供だなと公一は笑った。

「あと少しで神戸に着くから、早く行っておいで。」

「はい。」

美帆はいそいそとトイレに向かった。

新神戸から電車を乗り継いで、三人は山崎家の実家に着いた。

案の定、一族合わせて20人が大集合、その日の夜は宴会となった。

山崎家は飲食店のチェーン展開をする実業家一族で、次男である公一は東日本支社の支社長を任されていた。

元々は横浜に支社があったのだが、東北への展開を視野に入れて大宮へと支社を移転したため、鎌倉から大宮へと引っ越したのだった。

ちょうど5年前の彼岸の時期に父親がガンで他界した。

そのため毎年彼岸の時期に合わせて一族が集合することになった。

公一は社長である兄や二人の妹たちと杯を交わしていた。

由美子は母や兄嫁となにやら会合中。

美帆はといえば、昔から快活で一族中の人気者で、どこへ行っても頭を撫でられていた。

そんな宴会も12時を回る頃にはお開きとなり、めいめいが部屋へ散会していった。

「お父さん。明日のデート、楽しみにしてるよ！」
そういつて美帆は布団に潜り込んだ。

明日は娘と久々のデートか。

楽しみとためらいが入り交じる、不思議な思いの中で公一は眠りについた。

神戸のチャイナタウンを、公一は美帆と腕を組んで歩いていた。

9月の下旬とは言え、吹き抜ける風は少し暖かい。

南京町の西門あたりにある万華鏡のミュージアムに立ち寄り、鑑賞。美帆はキャー！綺麗！！とか言いながら取っ替え引っ替え片っ端から手に取ると、万華鏡を覗いていた。

南京町の広場に着くと、十二支の石像を片っ端から見て回り

「なんで13体あるの？」

とケラケラ笑いながら、余分なパンダの石像に文句を言う。

商店を覗いて中国のお面を被ってみたり、チャイナドレスを当ててみたり。

途中屋台の唐揚げをつつきながら本日のメイン、老舗の中華料理店へ。

店内に入ると豪華な調度品に囲まれて、予約してあった席に座る。出てくるコース料理に舌鼓を打ちながら、気になる話題へと移る。彼のこと。

勉強は出来るらしい、かなりの難関校に通っている。

「でね、変な危ない三人組に連れて行かれそうになったところを助けてくれたんだよ！」

身振り手振りで話す美帆はとても嬉しそうだった。

「中学までは野球やってたんだって。エースで4番だったらしいよ！今の学校は野球弱いから入らなかつたらしいけど。」

公一は昔、男の子が欲しかった。

いつかキャッチボールでもするか。

「数学や物理化学は得意だから、教えてもらってるんだよ！でも英語がからつきし苦手で、それは私が先生なんだ！」

公一の得意分野だ。そのうち揉んでやるか。

「喧嘩強いくせに涙脆いの。この前一緒に映画見てて、感動のシーンで私泣いちゃったんだけど、ヒロのこと見たら、私以上に涙流してるんだもん。」

なかなか感受性の豊かな奴らしい。

一方的におしゃべりする美帆のマシガントークに、公一は聞き役に徹した。

ほんの数時間でだいぶ敵の事がわかってきた。

信頼できそうな男で少し安心した。

会計を済ませて店を出ると、二人で港に向かった。

陽は傾いて、辺りに灯りが灯る。

海を見つめながら美帆は公一に

「お父さん、今日はありがとう！」

「ああ。」

美帆は公一に振り向いた。

「帰ったら、ヒロに会ってくれる？」

ちよっと悔しかったが、公一は答えた。

「美帆の一番大切な人なら仕方ない。会ってやるか！」

美帆は公一の首にすがりついた。

「ありがとう！お父さん大好き！」

「ああ。」

いつまでそう言ってくれるのかなと、一抹の寂しさを感じながら、公一は微笑んだ。

とても濃密な親子の時間を過ごし、一家は東京へと向かった。

帰りの新幹線もなかなかの混み具合だが、グリーン車は快適だった。美帆は相変わらずよく食べ、よく飲み、よくトイレへ行く。

脳天気な娘だと由美子と笑っていたが、ふと気付くともう15分近く美帆が帰って来ない。

もう横浜を越えて、あと少しで到着だ。

「美帆はどうした？」

「あら、トイレじゃない？」

ふたりはトイレのある方へ向き直る。

そのグリーン車のドアの向こうが少し騒がしい。

「ちょっと見てくる。」

公一は少し不安になり、席を立ててトイレへ向かった。

ドアが開くと人だかりが出来ていた。

「どうしました？」

覗き込んでる人に尋ねると

「なんか病人らしいですよ。お腹が痛いってうずくまってしまっ
て。」

人混みの向こう、トイレの前で車掌が介抱してしているらしく、うずくまる人に

「大丈夫ですか？」

と声を掛けている。

その人影を見て、公一は驚いた。

「美帆！」

慌てて人混みをかき分けて美帆に駆け寄る。

「美帆、どうした？」

美帆はお腹を抱えながら横になってうずくまっていた。脂汗を垂らしながら公一を見上げ、美帆は弱々しく

「お父さん・・・お腹が痛い・・・。」

公一は車掌に向き直り

「車掌さん！あとどれくらいで着く？」

車掌は時計を見て

「あと10分ほどです。」

「救急車を呼んでください！」

「わかりました！」

車掌は慌ててトイレの横の車掌室に入り、司令部へ連絡を取った。

「美帆！しっかりしろ！」

「美帆！」

騒ぎを察知して、由美子も来ていた。

駆け寄った由美子の手を、美帆はしっかりと握りしめ、痛みに耐えていた。

そこから到着までの時間は途轍もなく長く感じられた。

東京駅に着くと、すでに救急車が待機していた。

都内の大学病院にかつぎ込まれた美帆は、そのまま緊急入院し検査を受けることになった。

待機室で公一と由美子は祈るように無事の知らせを待った。

どれくらいの時間が経っただろう。

処置室から美帆がベッドに乘せられて出てきた。

痛みが引いたのか、安らかな顔で寝ていた。そのままICUへ運ばれて行った。

年輩の看護師が近寄ってくる。

名札には看護師長とある。

「美帆さんのご両親ですか？」

「はい。」

公一は立ち上がった。

師長は続けて

「美帆さんはこのまま緊急入院となります。先生がお待ちですのでどうぞ。」

と、説明室まで案内してくれた。

説明室に入ると、先ほどまで美帆の処置に当たっていた救命医ともう一人、少し貫禄のある医者が待っていた。

「お座りください。」

促されて公一と由美子は席に着いた。

対面に医師が二人、席に着いた。

彼らの向こうのシャウカステンにはレントゲンとCTの写真がかかっていた。

年輩の医者が口を開く。

「私は外科部長の神山といいます。この救命の仁科先生に呼ばれまして、検査に立ち会いました。」

言われてその仁科先生が軽く頭を下げる。

そして、神山医師の口から、考えもしなかった言葉が発せられた。

「お父さん、お母さん。気を強く持ってお聞きください。美帆さんはステージ3以上の卵巣ガンの疑いがあります。」

美帆はそのまま入院した。

神山医師の話によると、進行した卵巣ガンの疑いがあるらしい。

詳しくはもっと検査をしたり、実際開腹手術をしてみないとわからないらしい。

その日は容態も安定しているので、二人は自宅に帰り入院の支度を整え、翌日再び病院へ向かった。

お腹が張っているとのこと、腹水を抜き取って検査をし、MRI検査も行うとのことだった。

医師によると、卵巣ガンはなかなか症状が出にくく「サイレントキラー」と呼ばれているらしい。

進行すると腹部の張り、頻尿の症状が現れるらしい。

言われて、二人には思い当たる節があった。

この3日間、美帆はよくトイレに行っていた。お腹も張ると言っていた。

どうして気付いてやれなかったと悔やむ公一に、神山は昨日今日気付いても結果は一緒だと慰めてくれた。

その数時間後、やはり思わしくない結果が告げられた。

「やはりステージ3以上の卵巣ガンのです。3日後に切除手術を行いますよう。」

「先生、美帆は治るんでしょうか？」

神山は少し間を置いて答えた。

「とにかく開腹して、卵巣とそれに付随するリンパ節、腹膜を切除します。ただ・・・」

「ただ？」

神山は公一に向き直り、

「若年性の卵巣ガンはとても珍しいうえ、若ければ若い程進行が早いケースが多い。開腹した結果、手の施しようの無い状態だった場合は何もせず閉じる可能性もあります。その場合……」

「その場合、美帆はどうなるんですか？」

言葉を遮るように公一は質問した。

神山は振り絞るような声で言った。

「その場合、美帆さんの余命は三ヶ月とお考えください。」

公一は全身から力が抜けていくのを感じた。

「美帆の手術、よろしく願います。」

凜とした声で由美子は神山に言った。

こういう時、母は強い。

「全力を尽くします。」

そう言って礼をすると神山は説明室から出ていった。

説明室から病室へと案内された。

美帆は検査が終わって個室へと移されていた。

本人への告知はしていない。

急性の膵臓炎と腹膜炎だと言っている。

病室に入ると、美帆はベッド上で起き上がり、外を眺めていた。

公一達に気付いて、美帆は微笑んだ。

「大丈夫？痛みは？」

由美子が声を掛ける。

「うん、大丈夫。」

点滴に鎮痛剤が入っていると聞いていた。

今はそれが効いているらしい。

「美帆。先生から聞いていると思うが、3日後に手術をすることになった。」

「うん。」

少し弱気そうに俯きながら答える。

「炎症を起こしてる所を取るそうだ。そうすれば治る。」

公一は励ますように美帆に語り掛けた。

「治ったら、今度は横浜の中華街でデートだ！」

美帆は決意したように公一に向かって顔を上げ、笑顔で頷いた。

そして、由美子に向かって

「ねえ、お母さん。ヒロに電話したいんだけど。」

「あら、ダメよ。ベット上で安静でしょ？」

美帆は不満そうな顔をする。

「だって明日学校だよ？私が行かなかったら、ヒロ心配するもん。」

「じゃあ・・・。」

公一が遮って、提案をする。

「手紙を書いたらどうだ？」

「そうよ。そしたらお見舞いに来てくれるかも！」

由美子も公一の案に乗る。

ややあって、美帆は笑顔になった。

「うん、書く。おかあさん、レターセット買って来て！とびきり可愛いやつ！」

美帆は手紙を書いた。

神戸の旅が楽しかったこと。

その帰りにお腹が痛くなって入院したこと。

三日後に手術をして、しばらく入院するからお見舞いに来て欲しいこと。

どんなにヒロに会いたかったこと。

書きたいことはたくさんあったが、書ききれなくなると困るのでキリのよいところで終わらせ、封をし、由美子に渡す。

「お母さん、お願いね。」

公一は立ち上がり、

「いや、お父さんが行ってくるよ。郵便局に行って速達で出してもらってくる。」

と、由美子から手紙を受け取った。

美帆は嬉しそうな顔をする。

「ありがと！お父さん！」

公一は郵便局へ向かい、手紙を速達で出してきた。

だが、そのまますぐに戻れなかった。

小一時間、病院の近くにある公園をぶらついて気持ちを整理した。

病室へ戻ると、美帆は眠りについていていた。

その美帆の頭を由美子が優しく撫でている。

「寝たのか。」

「あなたが帰ってくるのを待つって頑張ってたんだけど、今日は検査をたくさんしたから、疲れちゃったみたい。」

公一は改めて美帆の寝顔を見る。

まだ少女らしい、少しふくよかなその顔を見ると、恐ろしい病魔に蝕まれているとはとても思えなかった。

「どこに行ってたの？」

由美子が聞く。

「うん、ちよっと公園を散歩。少し考え事をね。」

ベッドを挟んで由美子の対面に座りながら答えた。

「そう・・・。」

由美子はそう答えながら、美帆の髪を撫で続けた。

美しくも儚げな親子の姿に、公一には見えた。

美帆の手術の日の朝がきた。

手術は午後一時からだ。

剃毛や清拭などの手術前の準備を終えた。

呼ばれるまであと2時間位だろうか。

病室のドアをノックする音がした。

「どうぞ。」

公一が応え、ドアが開く。

「美帆！」

高校生くらいの男の子が立っていた。

走ってきたのだろう。

額には汗が浮き、息を切らしていた。

「ヒロ！来てくれたの？」

パアッと美帆の表情が変わる。

今まで公一達も見たことのない、自分たちに向けるのとは明らかに異質な類の、しかし素敵な笑顔だった。

ヒロと呼ばれた少年は、病室の中に入って来てベッドの横に立つ。

美帆の顔を見た後、窓際にいた公一達に向かって深々とお辞儀をした。

「遠山浩輝です。美帆さんとお付き合ひさせていただいてます。」「ちよっとうわずった声で挨拶する姿に、公一は好感を持った。

美帆はというと吹き出している。

「なにそれー、緊張？」

「うるさい、緊張すんの当たり前だろ！」

二人のやりとりが、若さ丸出しで微笑ましい。

笑いながら公一が浩輝に声を掛ける。

「まあまあ、来てくれてありがとう。美帆の横に座ってくれ。」

その声に、浩輝は改めて公一と由美子に頭を下げてから、美帆の顔を覗き込むようにしながら腰掛ける。

「大丈夫か？」

「うん。ちょっと悪い所切るだけだから。」

「そっか、よかった。」

浩輝がホッとしたように息をついた。

「それよりヒロ、学校は？」

意地悪そうな表情で美帆が尋ねる。

心にもないことを言う娘である。

「行ける訳ないだろ！昨日の夜手紙読んで、慌てて飛んできたんだぞ？」

それを聞くと

「まあいいわ。今日は許してあげよう。」

なんだか偉そうに応えている。

「なんだよ。」

ちよつと不服そうに浩輝が応える。

その光景を見ていた公一は、由美子を促し立ち上がる。

「美帆。お父さん達ちよつとコーヒー飲んでくるから、浩輝君とお話してなさい。一時間後に戻るから。」

浩輝にごゆつくり、と声を掛けながら二人は病室から出た。

背後から美帆達の声が聞こえてくる。

「大丈夫なのか？」

「それしか聞くこと無いの？」

「だって。」

「でも、来てくれて嬉しいよ！」

その会話を耳にしながら、病院の一階にあるカフェへ向かった。

「結構思った通りの子だったわ。」

「そうか？」

「ええ。たくさん話聞かされてたからかな？ 頭の中で想像してた男の子のイメージに近かった。」

「そうだな・・・。」

公一は想像してみたことはなかったが、由美子の気持ちは理解できた。

「それにしても、あの美帆の顔！」

由美子が歩きながら話を振ってくる。

「私たちには見せたことのない笑顔だったわね。」

「ああ。我々への愛とは異質の、それはまた大切な愛情なんだろうな。」

会ったらきつと嫉妬するかと思っていたが、実際に会ってみると不思議と彼を信頼できるような気になった。

いろいろな話を美帆に聞かされていたからだろうか。なんとも不思議な感情が自分の中にあることに、公一は少し驚いていた。

あの美帆の笑顔が続くためなら、あの小僧にくれてやってもいい。だから美帆が無事であって欲しい。

心の底から公一はそう思った。

公一達が病室に戻って小一時間ほどして、ドアを叩く音がした。

二人の看護師が入ってくる。

「山崎美帆さん。そろそろ向かいますよ。」

公一達は立ち上がり、ベッドの周りをあける。

看護師は美帆の肩に麻酔導入の注射をした。

そしてストレッチャーへと美帆を移し、準備を整えた。

「それでは手術室に向かいますので。」

三人は美帆を囲んだ。

まず公一達が声を掛ける。

「頑張れ。」

「頑張つて。」

由美子はそう言つて美帆の頭を撫でた。

「うん。」

美帆は軽く頷いた。

そして浩輝に目をやった。

「学校行け！」

「行けるか！」

笑いながら浩輝は応えた。

そんな浩輝に美帆は右手を差し出すと、浩輝はその手を握りしめた。

「待ってるからな。」

「うん。」

これから手術へ向かうというのに、安心しきつたような笑顔で美帆は答えた。

「では、皆さんはこちらでお待ちください。」

そう声を掛けて、看護師はストレッチャーを押していく。

「行つてきまーす！」

いつも家を出ていくような声で、美帆は手を振りながら出ていった。

しばらく三人ともそのまま立ち尽くしていた。

ふいに公一が口を開いた。

「浩輝くん。」

「はい。」

浩輝が振り返る。

「これから手術は六時間ほどかかるらしい。六時間後にまたここに来てくれないか？」

「ここで待ってちゃダメですか？」

浩輝が聞く。

もし、開腹の結果手の施しようが無かったら、早くに結果が判るは

ずだ。

それを浩輝に見せる訳にはいかなかった。

公一は笑いながら

「いや、どうせ待つだけだ。私たちが付いているから安心してどこかで時間を潰してきてくれ。」

それを察したのか由美子も

「そうよ。私たちに任せて！」

と笑いながら浩輝に言った。

浩輝は少し考えてから二人に向き直った。

「わかりました。また6時頃に、ここに来ます。」

そう言って頭を下げると、病室を出ていった。

ドアが閉まると、途端に由美子は心配そうな表情になった。

公一は由美子の肩を抱き寄せる。

「大丈夫、美帆は強い子だよ。」

まるで自分に言い聞かせているように声を出した。

美帆が病室を出て四時間後、ドアをノックする音がした。

ドアが開くと、そこには手術着姿のままの神山医師が立っていた。

その瞬間、公一と由美子はすべてを悟った。

そのまま暫く、三人の姿は固まったままだった。

説明室に通されて、神山と対面する。

着席すると、神山は重い口を開いた。

「お嬢さんに対する卵巣ガン、及び腹膜播腫の切除とリンパ節郭清の為、手術を行いました。しかしながら開腹の結果、腹膜全体への播腫の伝播とリンパ節への転移拡大、及び肝臓への転移が認められました。」

「それは・・・。」

公一は聞こうとするが、声にならない。

神山が説明を続ける。

「ステージ4の進行ガンと判断いたしました。処置としては、痛み
の元になっている卵巣ガンと炎症部位のみを切除し、閉腹しました。
」

「・・・治らないんですか？」

百戦錬磨の神山にとっても、この告知は辛かった。

「・・・美帆さんのガンの進行度合いからみて、抗ガン剤や放射線
治療は効果が無いでしょう。」

サーッと血の気が引いて行くのがわかる。

長い沈黙が続いた。

公一は意を決して尋ねた。

「それで、美帆はあとどれくらい生きられるんでしょうか？」
由美子は下を向いたままだ。

神山が口を開く。

「もって三ヶ月でしょう。あとは本人の生命力次第です。」

嗚咽が聞こえてきた。由美子は声を殺して泣いていた。

公一は、自分がすっかりしないといけないと、気持ちを奮い立たせながら質問をする。

「抗ガン剤は効果が無いと言われましたが・・・。」

「延命の効果があっても、せいぜい1、2ヶ月でしょう。その代わり、抗ガン剤には想像を絶する辛い副作用があります。」

公一は父親の最期を思い浮かべた。

抗ガン剤治療を行った父親は、様々な副作用の症状に苦しみ抜いた。美帆にそんな思いを味合わせたくはなかった。

そんな逡巡する公一を見て、神山が語り掛ける。

「これからの対処なんですが。」

「はい。」

「今、美帆さんはまだ麻酔を掛けた状態で手術室で管理しています。手術終了予定時刻をもって病室に戻します。これは今後どの選択肢を選んでも大丈夫なようにとの対処です。」

「それで・・・。」

「美帆さんに告知をして、延命治療を続けるのがひとつ。告知をして終末期医療を行うのがひとつ。」

「・・・告知をしない場合もあるんですか？」

やや間をおいて、神山が引き継ぐ。

「告知をしない場合、痛みをコントロールしながらやりたいことをさせてあげると言う選択肢もあります。」

どれを選べと言われても、今は混乱している。

それを察して神山は優しい口調で

「まあ、すぐに答えは出せないでしょうから、2、3日お二人でご相談ください。」

そういうと、神山は一礼をして説明室から出ていった。

長い沈黙が続いた。

由美子はまだすすり泣いている。

公一は時計を見た。針は4時を指していた。

「由美子！」

返事がない。

公一は由美子の肩を掴んで揺さぶる。

「由美子！しっかりしろ！」

ハッと我に返った由美子が顔を上げる。

目は泣き腫らしている。

「そんな目をしていたら、美帆や浩輝くんに感づかれてしまうぞ！」

「・・・そうね。」

由美子は立ち上がって出ていこうとする。

公一はその背中に声を掛けた。

「まず顔を洗って、それから看護婦さんに氷をもらって目を冷やしなさい。そうすれば腫れは引くから。」

由美子はコクリと頷いて、洗面所へ向かった。

公一は、今は不思議と涙は出てこなかった。

冷静に対処しなければ、という一家の長の立場から冷静でいられたのだろう。

意を決して、公一は病室へ向かった。

6時を回る頃、浩輝が病室に戻ってきた。

少し遅れて由美子が笑顔で入ってくる。

さすが我が妻だ。元の顔にすっかり戻っていた。

少しして、美帆がベッドに乘せられて帰ってきた。

体中からチューブやらコードやらが伸びていて痛々しい。

麻酔は切れているとはいえ、まだ少し残っているらしく夢うつつな状態だ。

酸素マスクの下から苦しげな吐息が漏れる。

「ヒロ・・・」

美帆が呟く。

親より恋人かと嘆きながらも、公一は浩輝を美帆の横に座らせた。浩輝は点滴の針の刺さっていない美帆の右手を握り、自らの頬に押し当てた。

「ここにいます。」

声のする方を見やり、弱々しく微笑んだ。

ベッドの反対側に公一と由美子は腰掛けた。

「おかえり。」

由美子が言う。

「おかえり。」

公一も言う。

美帆は公一達に向き直り、少し強めに声を出した。

「ただいま。」

浩輝は今夜このまま側にいさせて欲しいと言った。

麻酔から完全に覚めるまでは、話し掛け続けなければならない。

公一は、その役目は浩輝が一番適役だろうと思い、申し出を受けることにした。

浩輝に自宅に電話をさせ、浩輝の両親に事情を説明し許可をもらう。浩輝は病室に戻ると再び美帆の手を握り、美帆に話しかけた。

その光景を、公一は病室の端に座り眺めていた。

そして、ある思いがムクムクと頭をもたげて来るのを感じていた。これは親のエゴ以外の何物でもなかった。

そんなことに、この少年を巻き込んでもよいものだろうか？

そんな葛藤を胸に抱えながら、まんじりともしない夜を明かした。

少し眠ってしまったようだ。

ふと時計を見ると朝の5時だった。

美帆は痛み止めが効いているのか、すやすやと眠っていた。

由美子と浩輝はそれぞれ美帆の両サイドでベッドに突っ伏したように眠りについていた。

美帆と浩輝は手を握ったままだった。

窓の外から聞こえる小鳥のさえずりを聞きながら、公一は一つの結論に達した。

告知はしない。美帆の好きなように生きさせよう。

その日のうちに、公一は由美子に自分の意志を話し、同意を得た。そのまま神山と面会し、その後の方針を相談した。

10日後に退院し、日常生活に戻ることに。

10日に一度通院すること。

緊急時の対処法などを指示された。

退院までの10日間、浩輝は毎日時間を作ってやってきた。

彼が来る度に、美帆がどんどん明るくなっていくのが感じられた。卵巣ガンの切除が効いているのか、体調も良好なようだった。

そうして退院が翌日に迫った夜、公一は帰ろうとする浩輝を呼び止めた。

「浩輝君。飯でも食いに行かんか？」

「はい。」

公一は浩輝を連れて行きつけの寿司屋に入った。

人には聞かれたくない話なので個室を取った。

おまかせの握りを食べ終え、あがりのお茶を飲み終わると、公一は話を切り出した。

「浩輝君。君に美帆の父親として頼みたいことがある。」

急に改まった話し方だったので、浩輝は驚いた。

「どうしたんですか？」

浩輝が尋ねる。

公一は意を決して話し出した。

「落ち着いて聞いて欲しい。実は、美帆はもう長くは生きられない。」

「えっ？」

戸惑っている浩輝になおも言葉を続けた。

「本人には知らせていないが、美帆は末期のガンだ。このあいだの手術では手の施しようがなかった。」

浩輝は目を見開いたまま公一の顔を見ていた。

浩輝はそのままの表情で尋ねた。

「美帆はあと・・・どのくらい・・・生きられるんですか？」

「もって3ヶ月、あとは本人の生命力次第だそうだ。」

公一は続ける。

「この10日間、二人を見続けていた。君にこんな頼みをするのもどうなのかと考えた。」

「・・・。」

「君と一緒にいる時の美帆の幸せそうな笑顔を見ていたら、そうすべきだと思えるようになった。」

だんだん声が強くなっていくのを自分でも感じていたが、構わず言葉続けた。

「親として、娘には最期まで幸せな思いのままでいさせてあげたい。親のエゴであることも充分わかっているつもりだ。」

涙声になっていた。同時に涙が頬を伝っていくのを感じた。

公一は一歩後ろににじり寄り、そのまま土下座をした。

「告知はしない。頼む！美帆の最期の瞬間まで、あの子の側にいてあげてくれないか！あの子を優しい嘘で包んであげてくれないか！」
そう言いながら、涙がボトボトと自分の握りしめた拳の上に落ちていくのがわかった。

そのまま公一は堰を切ったように、土下座をしたまま背中を震わせて鳴咽した。

美帆が倒れてから一度も泣かなかった公一が、さめざめと泣いた。

最初は戸惑い、信じられない思いで聞いていた浩輝は、公一の鳴咽を黙って見つめていた。

この10日間、どんな体力が回復していく美帆を見ていたので、唐突な公一の告白が信じられなかった。

しかし、これほどまでに取り乱す父親の姿を見て、事実なんだということを理解することができた。

不思議と涙は出てこなかった。

二人で泣く訳にはいかないと思った。

どれくらいの時間が経っただろう。

公一の背中が震えが収まってきた。

それを待って、浩輝は静かに語りだした。

「お父さん。」

公一はしずかに顔を上げる。

その顔は、いつもの優しく威厳のある父親の顔ではなかった。

一人の弱りきった父親の顔だった。

その顔を見て、浩輝は意を決した。

「こちらこそ、美帆さんのそばにいらしてください。」

凜と言い放つ浩輝の表情は力強かった。

そして少し微笑んだ。

公一は再び崩れるように土下座しながら、弱々しい声で呟いた。

「ありがとう・・・。」

「さあ、何から話そうか？」

公一が切り出した。

あの衝撃の告白から一夜明け、今日は公一夫婦に自宅近くまで迎えに来てもらっていた。

昨夜の帰り際、公一と由美子に話しが聞きたいと申し出た。

今日は美帆が退院する日なので、それではと車で一緒に行くことにしたのだ。

「美帆の思い出の場所というのはありますか？」

「思い出の場所かあ。」

運転しながら公一は考え込んだ。

「まずは鎌倉だな。今でも鎌倉の話はよくするし。」

「・・・実はもう行ってきました。」

「ん？そうか・・・早いね。」

公一は笑った。

「とても素敵な家でした。小さい頃の美帆が見えた気がしました。」

「そうか・・・。」

そう言っ公一の視線がやや遠くなった。

「あとは私たちの実家かしら。」

由美子が切り出した。

「ただ、神戸と北海道だから・・・。」

「と、遠いですね・・・。」

高校生の分際で連れていけるような場所ではない。

「でも、私の実家の近くに広いひまわり畑があってね。美帆はそこがすごく好きで、夏休みになると必ず行ってたわね」

「ひまわり畑ですか。」

「美帆の一番好きな花はひまわり。知ってた？」

そういえば、夏休みのある日のデートで花束をせがまれた。確かひまわりの花束を贈ったことを思い出す。

「むりやり買わされました。」

笑いながら答える。

それを聞いて由美子もクスリと笑いながら

「花言葉知ってる？」

由美子がいたずらっぽく質問する。

聞き方が美帆そっくりだ。

「いえ。」

由美子は後部座席の浩輝に向き直って

「ひまわりの花言葉は”あなただけを見つめています”。」

「……。」

そういえば、花束を渡したときの見つめ方がいつもより念入りだった事を思い出した。

そういうことだったのか。

「……親父としては複雑だなあ……。」

少々拗ねたように公一が口を挟む。

それを聞いて三人はクスクス笑った。

美帆の両親は強い人たちだと思う。

悲しみや辛さを乗り越えて、今は美帆の幸せを叶えることに全力で当たろうとしている。

そんなことを考えてると、由美子が考え込むような仕草で

「でも、ひまわりはもう季節終わっちゃったのよねえ……。」

もう10月半ばである。どちらかというとコスモスや彼岸花ってところだろうか。

「なにか考えてみます。」

そんな美帆の情報を聞きながら、昼前に病院に着いた。

病室に入ると、すでに私服に着替えた美帆がベッドに腰掛けていた。「ヒロ、学校は？」

浩輝の顔を見るなりそんなことを聞いてくる。

「今日は中間テストが終わって秋休み。うちは二期制だからな。」美帆はにっこり笑って

「そっか！」

と、うんうんと頷いていた。その仕草が可愛らしい。

遅れて公一たちが入ってくる。

「なによ美帆、私たちが来るまで何もしないで待つてなさいって言うておいたじゃない。」

由美子が声をかける。

「だって朝ご飯食べてから何もする事がないんだもん。」少々口を尖らせながら答える。

「まったく、少しは世話焼かせなさいよね。」

「まったくだ。俺なんかもっとやることがない。」

そう言うのと、3人は微笑み合う。

素敵な家族だなと浩輝は思った。

そこへ神山医師が入ってくる。

私服の美帆を見て

「おやおや、回診がまだだったのにもういつでも退院できる状態だな。」

笑いながら神山は美帆の側に行く。

「先生、お世話になりました。」

美帆はピヨコンと頭を下げる。

「まあ、元気そうだから大丈夫かな？」

そう言いながら公一たちに同意を求めるように振り返る。

頷き合うと、神山は改めて美帆に向かった。

「美帆ちゃん。君の病気はまだ完治というわけではない。これからまだ治療が続くという事を忘れないように。」

「はい。」

「うん。学校は来週から通っていいけど、運動は禁止。いいね？」

「はい。守ります！」

「2週間おきに診察に来ること。調子が悪くなったらすぐに先生のところに来ること。わかった？」

「はい！」

「いい返事だ。」

大きな声で笑いながら美帆の頭をポンッと叩き、神山は出ていった。

看護師さんたちに見送られ美帆は無事に退院した。

一緒に帰らないのかとブーブー文句を言う美帆の乗る車を見送ったあと、浩輝は図書館へ向かった。

以前どこかの本で季節外れのひまわり畑の写真を見たことを思い出したのだった。

風景写真の写真集を片っ端から広げていく。

10冊目の本を開いたとき、そこには画面一杯にひまわりが咲いていた。

その写真の説明を読む。

静岡県袋井市とある。

その本を持ったまま、今度は地図や観光本のコーナーへ向かい、静岡県の本を片っ端から読んでいく。

静岡県袋井市に、季節外れのひまわり畑があるという。

その数25万本。

10月下旬から11月にかけて満開を迎えるという。

その本をコピーすると、本を片付けて図書館を出た。

辺りはもう暗くなっている。

美帆たちはもう自宅に着いただろう。

浩輝は公衆電話を探し、美帆の家に電話をかけた。
電話には由美子が出た。

「あら、浩輝くん。どうしたの？美帆？」

「はい、お願いします。」

電話の向こうで美帆を呼ぶ声がする。

すぐにドタドタと足音が聞こえた。

「ヒロ！なんで一緒に帰ってくれなかったの？」

いきなり説教から始まるとは……。

浩輝は苦笑しながら答える。

「ごめんごめん。ちよつと調べなきゃいけないことがあってさ。」

「しょうがないなあ。で、ご用件は？」

「用件がないと電話しちゃだめ？」

「あ、そーゆーいじわる言う？」

少し拗ねた口調が可愛かった。

「わかったわかった。用件は、デートのお誘い！」

「キャー！ホント？行く行く！！」

ものすごく弾けた反応に変わる。

「まだどこに行くって言ってないだろ。」

「だって、デートならどこでもいいもん！」

そんな風に言ってくれるのは嬉しいが

「行き先くらい聞きなさい！」

「はい。で、いつ、どこに行くの？」

「再来週の土曜日。行き先は静岡県。」

「えー、何しに行くの？」

それは言えないだろう。

「内緒！」

「ずるい！」

翌日、教えてもらっていた公一の人に電話をかけて、今回の旅の説明をし、了承を得た。

美帆との思い出の旅、第一弾が決定した。

今日の日本列島はおおむね快晴である。

大宮駅で朝7時に美帆と待ち合わせ。

二階のコンコースのオブジェ前で待っていると美帆がやってきた。白のワンピースに白い帽子。

よく似合っている。

「待った？」

「いや、5分くらい。」

「そっか。」

「じゃあ、切符買いにいきましょう。」

「あ、ちょっと待って。」

そう言うと美帆はバッグから封筒を取り出した。

「お父さんがこれヒロに渡せて。」

「お父さんが？」

受け取って中を見ると、新幹線の特急券と切符、往復分が入っていた。

「さすがお父さん！」

美帆がやってきた方向に向かって手を合わせて拝む。

美帆も浩輝の横で拝む。

「さあ、行こうか！」

「うん！」

まずは東京駅に向かい、そこから新幹線に乗り換え掛川駅へ向かう。進行方向左側の席に、美帆を窓際に座らせる。

東京駅まではあれほどおしゃべりだった美帆が、新幹線に乗った途端に無口である。

ずっと浩輝の左手を握ったまま、肩に頭をもたれている。

「どうしたの？」

「ん？」

浩輝の顔を下から見上げる。

この斜め45度からの美帆の見上げる顔に浩輝は弱かった。

「だめ。その顔反則。」

浩輝は顔を背けた。

「なんでー？」

トロンとした声で答える。

また、肩に頭をもたれ直す。

「なんかさ、ヒロとの初めての旅行って感じがして、なんか幸せなんだあ。」

可愛いことを言う。

「そっか。」

悪い気はしなかったので、そのまま1時間半ほどそのままだった。

掛川駅に着くと、東海道線に乗り換え、袋井駅に着いた。

そこからタクシーに乗り、運転手に住所を告げる。

駅前の道をまっすぐ南下し、しばらく行ったところで左折した。

「運転手さん、あとどれくらいですか？」

「あと5分くらいかな？」

「ありがとうございます。」

浩輝は背負ってきたリュックから目隠しを取り出した。

「美帆。これつけて。」

「なに？」

いぶかる美帆に「いいから。」と目隠しをした。

ふと運転手とミラー越しに目が合うと、意図を理解したのかにっこりと笑った。

浩輝も笑顔で返す。

そのうちタクシーが止まった。

浩輝は目隠しのまま美帆を降ろす。

「行つてらっしゃい！」

運転手はそう声をかけると車を発進させた。

「美帆。ちょっと我慢して。」

そう言うと、浩輝は美帆をお姫様抱っこした。

「キャッ！」

そのまま100メートルほど歩いて、美帆を降ろした。

「なに？なに？」

ワクワクと不安が入り交じった表情が目隠しの下に見て取れた。

「美帆。目隠しを取ってごらん。」

その声に美帆は恐る恐る目隠しを取った。

急に眩しくなり、目を細める。

徐々に目が慣れてくると、目の前に広がる光景に息を呑んだ。

「わあ……。」

そこは一面に咲く、季節外れのひまわりの中だった。

雲一つ無い青空に、黄色と黒のコントラスト。

25万本のひまわり畑は壮観だった。

ふと、美帆の目に涙があふれてきた。

「すごい……すごいよ……。」

見とれる顔とは、こういう顔のことを言うのだろう。

「これを見せたかったんだ。」

言いながら、後ろから美帆を包み込むように抱きしめる。

美帆は小さく震えていた。

お決まりのように、自分達より背が高いひまわりの中でかくれんぼをしたり、手をつないで歩いたり。

少しするとお腹が減ってきた。

浩輝は少し広い場所を見つけて、持ってきたシートを広げ、美帆を

座らせた。

「ちょっと待ってて。」

リュックをごそごそしてると、中からフランスパンとハム、チーズ、レタスと登山ナイフを取り出した。

浩輝は器用にナイフを扱うと、パンを適当な大きさに切って切れ込みを入れ、カラシとマヨネーズを塗り、レタスとハム・チーズを挟み、即席のサンドウィッチを美帆に渡した。

「わあ、美味しそう！いただきます！！」

頬張る美帆を見ながら、水筒からミルクティーをコップに出して渡す。

「へー。ヒロってこういうことも出来るんだ！」

もぐもぐしながら美帆が言う。

「惚れた？」

「うん。惚れ直した！！」

それを聞きながら、浩輝もサンドウィッチを頬張る。

食事が終わると、二人はシートに寝転がった。

周りをひまわりに囲まれ、真上には真っ青な空が広がっている。

まるでこの世界に二人つきりなような錯覚を起こす。

「すごいね。」

美帆が呟く。

その横顔を見ていると、このひまわりが美帆にダブって見えた。

夏に咲くひまわりが、季節外れのこの時期に寒さを向こうに回して、今を盛りと咲き誇っている。

そう、今の美帆は季節外れのひまわりだ。

本人は何も知らないが、今美帆の身体は病気にあらがって必死に生きようとしている。

浩輝は起きあがった。

「美帆！」

「うん？」

美帆は寝転がったまま、顔を浩輝に向けた。

「俺と同じ時代に生まれてくれて、ありがとな。」

「ヒロ・・・。」

美帆も起き上がり、浩輝を見つめた。

浩輝は美帆のあごに手を添えた。

二人の顔が重なり、唇を合わせた。

長くて優しいキスだった。

そして、しばらく二人は肩を寄せあって佇んでいた。

「おやおや、可愛いカップルだな。」

声がした方を向くと、作業着姿の老人が立っていた。

「こんにちは。」

美帆が声を掛ける。

「どこから来たんだい？」

「埼玉からです。」

浩輝が答えた。

「おや、随分と遠いところ来てくれたんじゃない。じゃあ、おみやげ持ってたもらおうかな？」

そう言うと老人はニツコリ笑って、持っていた鎌で周りのひまわりを10本ほど刈り取った。

それを、読んでいたであろうお尻のポケットに入っていたスポーツ新聞に器用にくるみ、ベルトに挿してあったひもで結んで即席の花束を作った。

そして美帆に手渡した。

「はい、これはお嬢ちゃんに。」

美帆の笑顔が弾ける。

「わあ！ありがとうございます。私、ひまわりが一番大好きなんです。」

それを聞くと老人はニツコリ笑った。

「そりゃあ嬉しいね。じゃあ、また来年もおいで！」

浩輝の胸にその言葉が突き刺さる。

「はい。また寄らせてください。」

二人が頭を下げると、老人は手を振りながら去っていった。

「さあ、行こうか。」

「うん。」

帰り支度を整え歩き出すと、美帆は腕を組んできた。

ひまわり畑からバス停に向かう。

ちょうどバスがやってきたので乗り込む。

美帆は名残惜しそうに畑の方に座る。

浩輝も横に座った。

バスが走り出した。

畑を見つめながら、美帆は小さな声で言った。

「ヒロ！また来年も連れて来てね。」

「ああ。」

そうならいい。

浩輝は力強く答えた。

「へえ、ヒロって山登るの?」

ある日の学校帰り、喫茶店で話をしていた。

美帆はまだ元気だった。

ガンに冒されているとは誰も思わないだろう。
よく笑い、よくしゃべる。

ただ、最近少し食が細くなってきたのが気にかかってはいた。

「ああ。中一の時の担任が登山部出身だね。本格的な登山はしなかったけど山歩きはよく連れて行かれたよ。」

「へえ。どんなところ行っただの?」

「最初は高尾山。それから筑波山、赤城山、日光男体山とか。」

「ふーん。」

かなり興味津々といった感じだ。

「私も登ってみたいな!」

「まだ病み上がりだから駄目ー!」

美帆は口を尖らせて反論する。

「ずるい! 私も綺麗な景色みたい。」

さすがに山歩きは今の美帆の体力では難しい。

「うーん……。」

どうしたもんかと考えている間にも、美帆は「連れてけー!」とぶーぶー文句のシュプレヒコールをしていた。

「おまえな……。」

浩輝は苦笑しながらふと、泊まりの山行で見た満天の星空を思い出した。

「山登りじゃあないけど、星見に行こうか?」

美帆の顔がぱあっと華やいだ。

「どこどこ?」

「そうだな。秩父の尾根かな。」

「どうやって行くの？」

「お父さんとお母さんも一緒に車で行くのはどお？」

「行く行く！」

この上なく嬉しそうに答えた。

さあ、計画を発動だ。

喫茶店を出た二人は、美帆の自宅へ向かった。

家に着くと、丁度晩ご飯の支度が出来ていて、浩輝はご馳走になりながら公一の帰りを待った。

最近公一もなるべく早めに帰るようにしていた。

毎日美帆の顔を見たいと決めたことだった。

ビーフシチューを食べていると、公一が帰宅した。

「お、旨そうだな。」

鞆と上着をソファに放り出すと、キッチンの流しで手を洗ってそのまま席に着いた。

「まあまあ、お行儀の悪いこと。」

笑いながら由美子が支度をする。

公一は浩輝と美帆を見やり、話しかけた。

「浩輝くんがいるってことは、何か悪巧みを持ってきたな？」

ネクタイを外しながら、笑顔で訪ねる。

「はい。すいません。」

悪びれずに答える。

「ねえ、お父さん、ヒロが星空を見に行こうって！」

「ほう。星空ってことは、この辺で見える星空とは違うわけだな？」

公一は浩輝に目を向ける。

「はい。秩父の尾根なんですけど、お父さんとお母さんも一緒に行きませんか？」

「というと？」

「車で行ければ、今の美帆でも大丈夫かなと思って。」

ふと由美子が食卓に座り、割り込んできた。

「私も賛成！　そういえばあらためてきちつと星空眺めたことって無いのよね。」

「でしょ？　私も。」

美帆が相槌を打つ。

「うーん、そうだな。お父さんもだ。行ってみるか。」

「やったー！！」

美帆が飛び上がって喜んでいる。

そのままいつ行くか、何時に集合、何を準備などの会議が行われた。

話も終わり、浩輝を駅へ送るために公一は車を出した。

「勝手に話進めてすいません。」

「何を言ってるんだ。感謝してるよ。」

美帆の嬉しそうな顔を見るのは親として嬉しいことだ。

「そこで、わがままついでお父さんをお願いします。」

秘密会談が車内で執り行われた。

11月半ばの土曜日の朝、山崎家に集合した。

車は公一が趣味のヨットやサーフィンで使うパジェロ。

荷物の積み込みは男衆二人で手際よく行われた。

浩輝が助手席に乗り込むと

「あれー、ヒロは後ろじゃないの？」

と、また美帆がプンスカする。

「今日はナジだから、俺は前。」

後ろを振り返りながら浩輝が答える。

由美子が後部座席に座り込みながら言う。

「あら？　お母さんとじゃご不満？」

「そーゆー訳じゃないけど。じゃあ今日はお母さんにいっぱい甘え

「ちやおう！」

と言うと、美帆は由美子の腕にすがりつきながら、振り返る浩輝に舌を出した。

「はいはい。」

笑いながら浩輝が答える。

「さあ出発しようか。」

公一の運転で、車は軽快に走り出した。

大宮から所沢を抜けて秩父市に入ると、川魚料理屋で昼食を採った。その後、山の中をドライブした。

朝方には少し曇っていて心配したが、夕方に向けて雲は晴れていった。

暗くなる前に車は中津川林道に向かう。

「こっちでいいのかい？」

道幅はだんだん細くなり、未舗装の道路にぶつかると公一は不安げに聞いた。

「大丈夫です。もう少し行くと尾根伝いの道に出て、一番高いところに少し広くなる場所があるので、そこが目的地です。」

「そうか。よく知ってるなあ。」

「ここは昔歩いたので。」

「ふーん。」

公一は浩輝が頼もしく見えた。

しかし、街灯の一つもない山道である。

美帆が不安げに口を挟む。

「こんなすごい山道、帰り大丈夫？」

公一と浩輝は顔を見合わせて微笑み、答えた。

「大丈夫大丈夫。」

「安心しなさい！」

ふたりが堂々と答えるのを見て、由美子が吹き出す。

それを見てまだ合点のいかない美帆が

「なんか隠してるでしょ？」

とむくれる。

笑いの絶えない車内だった。

やがて車は尾根の一番高い場所に着いた。

「さあ、着いたぞ！」

広場に車を止め、車を降りる。

「わあ！」

周りを見渡して、美帆が感嘆の声を上げた。

辺りに見える秩父連山の峰々が夕焼けに染まり、壮大な光景を見せていた。

横に由美子が立つ。

「すごいわね。」

そこに浩輝が椅子を二つ持ってきた。

「ふたりはここに座って眺めてて。」

そういうと、また車の方へ戻っていく。

「？」

不思議に思いながらも、美帆はまた山を仰ぎ見た。

そのまましばらく山々を見ていると、後ろの方でカンカンと釘を打つような音がする。

「どうしたの？」

音のする方へ向かうと、そこはキャンプ場と化していた。浩輝は組み上がった二組みのテントにペグを打ち込んでいる。

公一はバーベキューの準備。

「なにになに？」

ワクワクしながら美帆が訪ねる。

浩輝が答える。

「今夜はここにお泊まりだよ。」

公一も由美子もニコニコしている。

「あー、ズルい！知らなかったの私だけ？」
一同大笑いする。

公一はコンロの火を起こし、由美子は美帆に暖かい格好をさせている間、浩輝は近くから薪になる木を探し出して焚き火の準備を始めた。

地面に石を敷き詰め、上に木の板を乗せ、その上に周りの土を敷き薪を組んでいき、火を付けた。

「手際がいいなあ。」

公一が感心する。

「昔、先生に仕込まれました。」

コンロの火も起きて、美帆と由美子はテーブルに食器を準備。焼き担当は公一と浩輝。

辺りに肉の焼ける香ばしい香りが漂ってきた。

「さあ、腹が減ったぞ！」

公一はそう言いながらクーラーボックスの中をゴソゴソしている。

「さあ、座った座った。」

4人は席に着いた。

「今夜のことは内緒だぞ！」

公一はそう言いながらワインボトルを取り出した。

「いいんですか？」

浩輝が尋ねる。

「あら、私もこっそり飲まされてたよ？」

美帆が代わりに答える。

家から持ってきたらしい、上等なワイングラスに赤ワインが注がれた。

「オホン。じゃあ僭越ながらお父さんが。」

そう言って公一はグラスを掲げる。

「みんなの幸せと、この素晴らしい風景に！乾杯！！」

「乾杯！」

みんな杯を合わせてグラスに口付けた。

丁度峰の間に見えていたオレンジ色の残滓がだんだん消えていき、空は紫から闇へと色を変えていった。

今は焚き火とコンロの火と、オイルランタンの明かりだけが4人を照らしていた。

「美帆、見てごらん。」

浩輝が空を見上げながら言った。

美帆は空を見上げた。

目が慣れてきた。

澄んだ山の空気は、星の光を遮るものが何も無かった。

「すごい・・・。」

美帆は感嘆のため息をついた。

天の川と言うものを初めてしっかり見たと思う。

公一が口を開く。

「これを見せるには泊まるしかないって言い出してな。お父さんたちも悪巧みに乗ったんだ。」

「でも、お母さんも見れてよかった。」

由美子も相槌をうつ。

「みんなありがと！」

みんなの気持ち伝わって、美帆の目には涙が溢れていた。

「おいおい、そんなに泣くほどの事じゃないぞ！」

「そうそう。さあ、お肉が焦げちゃうから早く食べましょう。」

由美子に促され、公一がみんなに肉を取り分けた。

山の上の楽しい晩餐会が始まった。

食事も、後片付けも終わり、4人は椅子に腰掛けながら空を見上げていた。

そこへ流れ星が流れた。

「あ、流れ星！」

美帆が驚いたように言う。

「ずっと右の方を見ててごらん。」

浩輝が言うのと、3人は言われた方をじっと見ている。するとそこから流れ星が続けてふたつ流れていった。

「あー、また見えた！」

美帆がハシャぐ。

公一は浩輝を見ながら言った。

「浩輝君。これってもしかして？」

「はい。今日は実は獅子座流星群の最盛期なんです。」

「狙ってたな？」

「はい。」

やられた！という表情の公一に、浩輝は少々得意げに答えた。

美帆を喜ばす為にあらゆる知識を動員して進めていく浩輝に、美帆に対する愛情の深さを公一は感じ取っていた。

感謝とともに、これから起こるであろう辛い日々に巻き込んでしまった事を心の中で詫びていた。

そんな表情に、公一の真意を感じ取った浩輝は、静かに、そして美帆に気付かれないように首を振って微笑んだ。

美帆は相変わらず流星探しをしている。

「でも、こんだけ降られちゃうとありがたみ無いかな？」

美帆が言う。

浩輝が答える。

「願い事を言えるチャンスが倍増だろ？」

「そっか。」

うんうんと頷いて、美帆はまた空を眺めた。

「何をお願いするの？」

由美子が尋ねる。

「だめ！それ言っちゃったら叶わないでしょ？」

「あ、そっか。」

親子で笑い合う。

それを見ながら、公一と浩輝は同じ事を考えていた。

この光景がずっと続けばいいと。

少しお酒が進んだ公一は由美子を伴って早めにテントに向かった。

「あまり夜更かしするなよ！」

「はい！」

美帆が答える。

テントに入りかけながら美帆たちを見やると、ふたりは焚き火に向かって並んで座っていた。

浩輝がそっと自分の掛けていた毛布を美帆にも掛け、二人でくるまうってこそそしゃべりながら、時々笑っている。

公一はテントに入って寝袋に入った。

「美帆が愛した人が浩輝君でよかった・・・。」

由美子が呟く。

その目には涙が光っていた。

一瞬おいて、公一は答えた。

「そうだな。」

公一には、首を振ったときの浩輝の笑顔が忘れられなかった。

美帆は、浩輝と一つの毛布にくるまりながら、浩輝の肩に寄り添っていた。

「あ、また流れ星！」

そう言って浩輝の顔を見上げると、浩輝は遠くを見つめていた。

「何をお願いしたの？」

美帆が尋ねる。

「ん？」

「言えないこと？」

浩輝は美帆の顔をのぞき込んで答えた。

「今、美帆とキスが出来ますようにってね。」

美帆はちよつと赤くなった。

「顔赤いぞ？」

冷やかすように浩輝が言う。

「焚き火の火だもん。」

照れくさそうに答えながら、肩にかかっていた毛布を頭までスッポリかぶると、そのまま上を向いて浩輝にくちづけた。

すぐ唇を離すと、驚いた顔の浩輝に向かって

「まいったか！」

と笑いかけた。

「うん、まいった！」

浩輝はそう言うのと、再び美帆の顔を見つめた。

美帆は静かに目を瞑る。

再びそつと唇を重ねた。

長い、長いキスだった。

そんな二人の頭上に流れ星が降り注いだ。

12月に入っても、美帆の体調はあまり変わらなかった。

公一は、美帆の診察日とは別に神山医師のもとを尋ねた。

「今のところ、目立った症状の進行は見られませんね。」

「そうですか。」

「おそらく精神的に充実していることが効を奏しているんでしょう。」

確かに最近の美帆は幸せそうだ。

精神的な安定が吉と出ているのだろう。

「しかし・・・完治へ向かっているわけではありません。多少の延命に繋がっているとは思いますが・・・。」

神山は続けた。

希望を持たせてはいけないのだ。

「はい。」

わかっているとはいえ、辛い言葉である。

「とりあえずしばらくはこのままという事で。急に悪化することはしばらくはないと思いますので、旅行なども今のうちに。」

「はい。ありがとうございます。」

そう言って公一は退室した。

旅行は考えてある。

正月に毎年家族で行っていたハワイに連れていこうと思っていた。そんなことを考えながら帰宅し、浩輝に連絡を取ろうと思っていた矢先に電話が鳴った。

あの山でのキャンプのあと、浩輝はずっと考えていた。

自分がどれだけ美帆のことを愛しているかという事。
美帆が自分にとってどれだけかけがえの無い存在かという事を。
美帆と一緒にいる時も、美帆の顔を見つめるたびに思いこんでしま
うので、時々美帆にからかわれていた。
そして、今日決心したことがあった。
公一に話しておきたいと思った。
そして電話を掛けた。

次の日、浩輝は公一の会社を尋ねた。
支社長室に通され、応接ソファで対面した。
お茶を持ってきた秘書に

「君はしばらく席を外してくれ。」

というと、公一はソファに腰掛けた。

「わざわざ来てくれてありがとう。」

「いえ、僕もお話したいことがありましたから。」

「まあ、飲んで。」

お茶を勧め、公一も一口啜ると話を続けた。

「僕の話はね、正月休みに美帆をハワイに連れていこうと思ってる。」

「はい。」

「毎年正月に行ってる恒例の旅行なんだが、君も一緒に行ってくれないだろうか？」

「え？」

唐突な申し出に浩輝は戸惑った。

「旅費はもちろん僕が出す。美帆も喜ぶ。」

「・・・。」

浩輝は考え込んだ。

しばらくして公一が再び口を開いた。

「どうだろう、浩輝君。」

浩輝の答えは予想に反していた。

「いえ、お父さん。とても嬉しいんですが、今回俺は辞退させていただきます。」

「なぜだい？」

公一は理由を聞いてみたくなった。

「毎年恒例の、家族水入らずを邪魔したくはありません。」

「しかし、美帆が悲しむぞ。」

浩輝は笑顔になって言う。

「いえ、美帆と俺の結びつきはそんなにヤワじゃありませんから。それにいつも通りにしないと！」

ああ、この少年はいつも美帆が最優先だったと痛感した。改めて浩輝の美帆に対する想いの深さに感謝する。

「その代わり、成田には迎えに行きます。」

「わかった。ありがとう。」

すると、浩輝が真顔になった。

「それではお父さん、僕からのお願いを聞いてください。」
あらたまった口調に公一は少し緊張した。

「なんだい？」

浩輝はやおらソファーから降り、土下座をした。

「美帆さんを俺にください。美帆さんと結婚させてください！」
公一は息を飲んだ。

「おいおい、君はまだ16だぞ。」

「わかってます。男は18にならないと結婚できないのも知ってます。」

「じゃあ・・・。」

「婚約させてください。そして美帆が頑張って18まで生きてくれていたら、その時は本当に結婚させてください。」

「・・・。」

公一は絶句した。

美帆の18歳は来ないもんだと自分は腹を括っていた。

しかし、目の前の少年は未来を見続けていた。

しかし、浩輝の将来を縛るわけにはいかない。

「・・・浩輝君。もし仮に、美帆が18まで生きてくれたとしても、いずれは間違いなく君より先に逝く子だ。そんな約束を出来るわけがないだろう!」

浩輝はなおも食い下がる。

「いいんです。俺は美帆の生きる希望になりたいんです!」

公一は体が震えるのがわかった。

しばらく考えて、公一は口を開いた。

「浩輝君。これはすぐに結論が出せる問題ではない。しばらく時間をくれないか?」

浩輝は体を起こした。

「はい。」

「答えが出たら連絡する。」

「わかりました。宜しくお願いします。」

浩輝は頭を下げた。

再び顔を上げた時、浩輝はスッキリした顔をしていた。

夜、浩輝の申し出を考えながら、公一は一人、リビングでスコッチをあおっていた。

なかなか酔えなかった。

踏ん切りが付かず寝室に入ると、先にベッドに入っていた由美子が声をかけた。

「どうしたの?」

「え?」

「なんだか考えごとがまとまらないように見えて。」

「ああ・・・。」

公一はベッドに腰掛けた。

「今日、会社に浩輝君が来た。」

「それで？」

「美帆との結婚を申し込まれたよ……。」

「え……。」

どうやら由美子も戸惑ったようだ。

「まだ結婚は出来ないから、せめて婚約させてくれって。」

「でも……。」

「ああ、そうだ。たとえ結婚できたとしても、彼の将来を考えたら簡単に承服できないだろう。でもな……。」

「でも？」

公一はあの時の浩輝の顔を思い出した。

「そんな姿を俺たちは見たかったのかもしれないってさ。」

何かを察した由美子はベッドから起きあがって答えた。

「結論出てるみたいね。」

由美子に話しながら、どうやら公一自身答えが出せたようだった。

「そうだな。もし美帆が18歳を迎えられた時にまた考えればいいことだな。」

ところが晴れ晴れとした。

翌日、公一は改めて浩輝と会った。

「浩輝君。昨日の君の申し出の件、いろいろ考えさせてもらった。」

浩輝は不安そうな顔をしている。

「そんな顔するな！君の申し出を受けるよ。」

「本当ですか？」

とたんに嬉しそうな顔になる。

「おいおい、美帆に断られたら元も子も無いんだぞ？」

「それは大丈夫です。自信ありますから！」

公一は笑った。

「こいつ、ぬけぬけと！」

浩輝も笑う。

「では、もう一つお願いがあります。」

「ん？」

「今年のクリスマス、美帆と一緒に過ごさせてください。」

「というと？」

浩輝は一瞬間を置くと、改めて答えた。

「あの鎌倉の家で一晩一緒に過ごさせてください。そこで美帆にプロポーズしたいんです。」

一晩ふたりきりで過ごさせるという事はどういうことか、公一にはわかっていたが、もうそれを止める気も起きなかった。

「わかった。今、あそこの家には何も無いから、いろいろ揃えておこう。」

「いえ、そんなにいりません。」

「どうすればいいんだい？」

「はい。ほんの少しの食器類と、カウンター用の椅子。それとベッドマットと簡単な寝具だけあれば。」

そうだ、この二人には他に何もいらないのだろう。

「わかった。用意しよう。他に何か必要なものが出てきたら言ってくれ。」

「はい。ありがとうございます。」

頭を下げて、浩輝は出ていった。

公一は自分の椅子に腰掛けて、ふうと息をついた。

「あとは頼むよ……。」

そう呟いて、公一は目を閉じた。

街中にはクリスマスソングが溢れていた。

鎌倉へ向かう電車の中、

浩輝の横に座る美帆は、浩輝の肩に頭を預けかすかに寝息を立てていた。

今日はクリスマスイブ。

世の中の恋人たちにとって、一番大切に一番楽しい日だった。

美帆を迎えに行った時に、公一から言われていたことがあった。

最近、美帆は多少貧血気味だから十分気を付けてくれと。

確かに最近の美帆は少し疲れやすくなっていた。

だんだん、美帆の命の火が削られていつているのだろうか？

そんなことを考えながら、浩輝は美帆の寝顔を見つめていた。

「どうしたの？」

そのままの態勢で美帆が囁いた。

「起きたのか？」

「うん。」

顔を上げて、浩輝の顔を見上げた。

「もうすぐ着くよ。」

「うん。」

美帆は再び浩輝の肩に顔を寄せる。

その少し弱々しい美帆の肩を抱き寄せた。

やがて電車は鎌倉駅のホームに吸い込まれていく。

駅を出ると、駅前の店々のショーウィンドウにはクリスマスの飾り付けが溢れている。

「綺麗ね・・・。」

「ああ。」

今日はあまり二人の会話が続かない。
二人とも今日の雰囲気浸っていた。

駅前の喫茶店で軽く昼食を済ませると、二人は江ノ電のホームへ向かった。

今日はやはりカップルが多い。

誰もが楽しそうに腕を組んだり手を繋いだり、幸せそうな空気が漂っていた。

電車が発車し、しばらくすると目の前に鎌倉の海が広がった。
海面が陽射しでキラキラと光っている。

「うん。今日も綺麗な海！」

美帆が嬉しそうに呟いた。

「そうだな。」

なんだか浩輝も嬉しく思えた。

やがてその四両編成の小さな電車が七里ヶ浜の駅に着いた。

「どうする？ タクシー呼ぶ？」

美帆を気遣い、尋ねる。

「ううん。歩きたい。」

美帆が笑顔で答える。

「そっか。じゃあ歩こう。」

坂道をゆつくりと、手を繋ぎながら登っていく。

途中のスーパで食材を購入し、さらに坂を上っていく。
坂を上り詰めると、少し細い道を左に曲がる。

少し行くと、オレンジ色の外観の建物が見えてきた。

「着いたー！」

美帆が嬉しそうに言う。

美帆は玄関の鍵を開け、先に中に入っていく。

「わあ、なにこれ？」

リビングの方から美帆の声が聞こえる。

浩輝が遅れてリビングの方へ上がっていくと、美帆がリビングの真ん中であたりを見回していた。

キッチンには調理器具と食器やグラスが揃っていた。

アイランドキッチンのカウンターにはスツールがふたつ。

窓の近くに目をやると、大きなもみの木が置かれている。

飾り付けは完了している。

どうやら公一が気を利かせて設置していったようだ。

暖炉の横には薪や新聞紙が置かれ、その前にはクイーンサイズのベッドマットにシーツが敷かれ、二つの枕と布団がセットされていた。

「私たちの新居みたいね！」

美帆が嬉しそうに言う。

ああ、この笑顔を俺は見たいんだなと浩輝は思った。

「コーヒー入れるね。」

そういうと、美帆はキッチンに向かい準備を始めた。

浩輝は暖炉に向かい、火を起こし始めた。

薪を組み、下に新聞紙を配し、火を着ける。

しばらくして火が大きくなり、パチパチと薪が音を立てて燃え上がってきた頃、薪の燃える香りに混じってコーヒーのいい香りが漂ってきた。

「コーヒー入ったよ！」

暖炉の前で座り込んでいた浩輝のもとへ、トレーを持った美帆がやってきた。

どんどんいい匂いが近付いてくる。

美帆は浩輝の横にトレーを置いて、その横に座り込んだ。ふたりは暖炉の炎を見つめながら、コーヒーに口を付けた。

ふたりを薪の燃える音が包み込む。

コーヒーを飲み終わると、二人はベランダに移動した。
相変わらず素晴らしい展望だった。

眼下には町並みが広がり、その先には輝く海が覗く。

風もなく穏やかな陽気だが、やはり12月の外気は少し冷たかった。

「寒くない？」

浩輝が尋ねると、美帆は海を向いたまま

「抱きしめて！」

と答える。

浩輝は美帆の後ろから覆い被さるように抱きしめた。

「うん。あったかい。」

美帆がケラケラと笑う。

しばらくそのまま、ふたりは海を眺めていた。

陽が少し傾いてきた。

美帆はキッチンに向かい、料理を始めた。

「何が出来るの？」

「内緒！」

美帆が笑いながら舌を出す。

「わかったわかった！」

そう言いながら、浩輝は風呂の準備をしに行った。

風呂はこの家の三階にある。

少し大きめのジャグジーになっている。

窓からは絶景が広がっていた。

風呂を沸かしキッチンに戻ると、美帆は圧力鍋をコンロに掛けていた。

「ねえ、ヒロ見て！」

美帆は言いながら冷蔵庫を開く。

中には七面鳥の丸焼きと、大きなクリスマスケーキが入っていた。
その下の段にはシャパンが一本。

「お父さんが用意してくれてみたい。」

「粹なお父さんだ。」

そう言い合いながら、浩輝はキッチンに立つ美帆を見つめた。本当に夫婦のような感じがした。

窓の外が夕焼けに染まっていく。

キッチンやリビングも暗くなってきたので、電気を付けた。

「出来たよ！」

美帆が嬉しそうに言う。

浩輝は食器の配膳を手伝った。

カウンターの角を挟んではす向かいに座る。

目の前には七面鳥。

そしてサラダとパン。

「はいどうぞ。」

美帆が圧力鍋からよそったのはビーフシチュー。

「旨そう！」

「お母さん直伝だからね！自信あり！」

自慢げに腕まくりしながら答えた。

「ヒロ！シャンパン！」

「おう！」

浩輝はシャンパンのコルクにナプキンを被せ、栓を抜いた。

ポンッ！っと小気味良い音を立てた。

ボトルの中に泡が立ち上るのが見える。

グラスにシャンパンを注ぐと、美帆がそれを掲げる。

「あ、ちよっと待った。」

浩輝は思い出して、ツリーに向かいイルミネーションの電源をコンセントに差した。

パアッとツリーが光に包まれる。

「キレイ・・・。」

「美帆。キャンドルに火を着けて。」

美帆はマッチを擦り、カウンターの上の燭台に乗ったキャンドルに

火を着けた。

浩輝はリビングとキッチンの電気を消した。

「うわあ……」

美帆はうっとりしたような声を上げた。

「美帆、見て！」

浩輝がベランダの先へ視線を促す。

そこには眼下に街の明かりが広がり、イルミネーションの様だった。

「すごい……」

浩輝が美帆の横に座り、グラスを持った。

「メリークリスマス！」

「メリークリスマス！」

グラスが甲高い音を立てて重なる。

晚餐が始まった。

美帆のシチューは本当に美味しかった。

料理に舌鼓を打って、最後にケーキの登場。

「お父さんはこのサイズ、二人で食べきると思ったんだろ？」

浩輝が笑いながら言う。

「見栄でしょ！」

美帆が笑いながら答える。

切ったケーキとコーヒーを持って、再び暖炉の前に座る。

そこで、ふたりはたくさん話をした。

お互いの小さい頃の話や、ふたりの思い出話。

話題は尽きなかった。

どれくらいの時間が過ぎただろう。

「そうだ、お風呂沸いてるぞ。」

浩輝が言うと、美帆は少し恥ずかしそうに

「うん……」

と答えた。

その後に待っていることに思いを巡らせたようだ。

「先に入って・・・。」

浩輝が意地悪げに聞く。

「一緒に入る？」

「バカ・・・。」

暗くても、美帆の耳まで赤くなるのがわかった。

「わかったよ！」

笑いながら、浩輝は先に風呂に向かった。

先に風呂を出てパジャマに着替えて浩輝が戻ると、美帆はキッチンの片付けを終わらせていた。

手際の良さに感心した。

「上がったよ。美帆も入っておいで。」

「うん。」

美帆はエプロンを外しながら答え、風呂に向かって階段を上がっていった。

浩輝はその姿を見送ってから、カバンの中から小さなケースを取り出し、枕の下に隠した。

少し時間が経って、美帆が階段を降りてきた。

真っ白なパジャマに身を包んだ湯上りの美帆は美しかった。

浩輝は息を吞んで見つめた。

その視線に気付いた美帆が呟く。

「そんなにジッと見ないで・・・。」

浩輝はハツとして、美帆をベッドに手招きした。

美帆を自分の左隣に座らせた。

ふたりを暖炉の火が照らし出す。

「キレイだよ、美帆。」

美帆の瞳を見つめながら囁くと、美帆は目を閉じた。

浩輝はキスをした。

最初は一瞬。

再びキス。

今度は長めのキスだった。

キスをしながら、浩輝は枕の下からケースを取り出した。

唇を離すふたり。

目を開けた美帆は、目を潤ませていた。

「美帆……。」

浩輝は美帆の目の前にケースを取り出した。

「何？」

少し驚いた表情に変わる。

浩輝はケースを開ける。

中には指輪がふたつ。

「え……？」

美帆が息を呑む。

「美帆。」

浩輝は美帆の目を見つめながら言葉を繋ぐ。

「美帆。結婚しよう。」

言った瞬間に美帆の目から涙がこぼれ落ちた。

「ヒロ……。」

美帆は浩輝の胸に顔を埋めた。

小さく震えていた。

「ちゃんとお父さんにもお願いしたよ。美帆をくださいって！」

言い終わる前に、美帆は浩輝に抱きついてきた。

しばらくそのまま、美帆が泣き終わるのを待った。

しばらくして、美帆が呟いた。

「いいの？」

「ん？」

「私で・・・いいの？」

今度は見上げながら尋ねた。

この顔に弱かった。

浩輝は微笑んだ。

「美帆じゃなきゃダメなんだ。」

言いながら、美帆のおでこにキスをした。

そして美帆の左手を取り、薬指に指輪をはめた。

美帆は指輪をはめた左手をウツトリと眺めている。

「さあ、美帆も俺に着けて！」

もう一つの指輪を美帆に渡すと、美帆は震えながら浩輝の薬指に指輪をはめた。

浩輝は美帆の両手を取り、美帆の目を見つめた。

「俺は、美帆を死ぬまで愛します。いや、永遠に美帆を愛します。」
また、美帆の瞳から一筋の涙が流れた。

「幸せに・・・してください・・・。」

そのまま、美帆の方からキスをしてきた。

激しいキスだった。

二人はお互いの唇を貪るようにキスをした。

そのままベッドに倒れ込む。

浩輝はそっと唇を離し、美帆の目を見つめながら囁いた。

「美帆のすべてが欲しい・・・。」

美帆は静かに頷いた。

美帆の白い首筋に唇を這わすと、その口からかすかなため息と、愉悦の囁きが聞こえた。

そのまま浩輝は美帆のパジャマのボタンを外す。

美帆はブラジャーをしていなかった。

パジャマの下から、小柄な割に豊満な乳房が覗く。

「恥ずかしい・・・。」

消え入りそうな声で、美帆が呟く。

「綺麗だよ、美帆・・・。」

そういうと、浩輝は美帆の乳房のてっぺんにある蕾を口に含んだ。美帆の胸が大きく息を吸って盛り上がる。

「ああ・・・。」

声を上げる美帆。

美帆のすべてが愛おしかった。

その夜、ふたりは初めて結ばれた。

朝日に包まれて、浩輝は目を覚ました。

横には美帆が穏やかな寝息を立てている。

まだふたりが結ばれたことが夢のようだったが、ふとシーツに目をやるとそこにはうっすらと破搔の後である血痕が滲んでいた。

浩輝はそのまま美帆の寝顔を眺めていた。

この時間が永遠に続けばいいと思った。

美帆とひとつになった時、暖炉の火に浮かび上がる美帆の裸体の美しさに息を飲んだ。

その美しい裸体が自分の動きに合わせて艶めかしく動く様は、今まで見たこともない美しさと妖艶さだった。

そんなことを考えていると、美帆も目を覚ました。

自分を見つめる視線に気が付いた美帆は、浩輝を見つめながら腕を広げる。

浩輝が顔を近づけると、美帆は浩輝に抱きつき、唇を貪った。

大胆に変貌した美帆に驚きつつ、浩輝は身を委ねた。

その日は一日中、お互いを貪り合った。

風呂に一緒に入ってはひとつになり、ベッドに戻ってはまた抱き合った。

お互いが一瞬たりとも離れたくなかった。

もうすでに、美帆は体を合わせる快楽に酔えるようになっていた。

浩輝は自らの精を、美帆の体内に解き放っていた。

悲しいかな、美帆はもう子供が出来ない体だった。

しかし、浩輝はこのまま奇跡が起きて子供が出来て欲しいと思った。

そうして、次の日ふたりの新婚旅行は幕を閉じた。

ハワイからの帰路、今は飛行機の中。
公一の横で、美帆は寝息を立てている。

4泊6日の旅だった。

貧血気味の美帆に無理をさせないように、あまりアクティブなスケジュールは立てなかった。

しかしそれが功を奏したようだった。

毎年泊まるコンドミニアムを中心に、ビーチとショッピングと食事に終始した。

唯一ヨットでのクルージングがとても良い旅の思い出となった。

家族水入らずのゆっくりとした旅となった。

最初は浩輝も誘ったのだが、断られた。

しかし濃密な家族の時間が過ごせたことは浩輝に感謝だった。

だが、この6日間の美帆を見ていると、明らかに体力が落ちてきていることが感じられた。

公一は美帆の寝顔を見つめながら、この寝顔をあとどれくらい見ていられるんだろうかと考えていた。

「あなた・・・。」

それを察したのか、隣の由美子が公一の肩に手を置いた。

「大丈夫。」

そう、切られていた命の期限はもう過ぎている。

いつ何が起こっても動じないように覚悟を決めておく必要があった。それを再確認する旅行でもあった。

飛行機は羽田に到着した。

入国手続きを済ませゲートを抜けると、見慣れた笑顔が待っていた。

美帆の表情が一気に明るくなる。

「ヒロ！」

美帆は浩輝の元に駆け出すと、その首に飛びついた。

「おいおい・・・。」

後ろに一步後ずさりしながら、その攻撃を受け止めた。

「ただいま！」

はしゃいだ声で美帆が言う。

「おかえり。それから明けましておめでどう。今年もよろしく。」

それを聞いて美帆は浩輝から体を離し、お辞儀をした。

「明けましておめでどうございます。今年もよろしくお願いします
！」

言い終わるやいなや、また浩輝に抱きついた。

「こらこら、親の目の前であんまりアツアツを見せつけるな。」

公一が笑いながら、カートを押してやってくる。

由美子も合流して、新年の挨拶が交わされた。

美帆は由美子とベンチに腰掛けて話している。

浩輝は公一に話しかけた。

「じゃあ、美帆を明日までお預かりします。」

「ああ、よろしく頼む。明日は美帆を病院まで連れて来てくれ。」

翌日は美帆の検査の日だった。

「はい。」

一礼して美帆の元へ向かおうとすると

「浩輝君。」

と呼び止められた。

見ると公一が手招きしている。

近寄ってきた浩輝に公一は切り出した。

「美帆の体力がだいぶ落ちてきてるようだ。注意してやってくれ。」

浩輝にとってあまり聞きたくない話題だった。

「はい。」

表情を引き締めて頷いた。

空港で公一たちと別れ、浩輝は美帆とモノレールに乗っていた。

「これからどこに行くの？」

浩輝の肩にアゴを乗せながら美帆が聞いてきた。

「遊園地。」

美帆の顔が笑顔に変わる。

そのまま電車を乗り継いで、池袋からとしまえんへ辿り着いた。真冬だが、冬休み中ということもあってなかなかの混雑だった。

「そういえば私たち、付き合って初遊園地だね。」

「そうだな。何に乘りたい？」

「モチロン！」

そう言って、美帆はジェットコースターを指さした。

「やっぱり・・・。」

浩輝はコースターが苦手だった。

二つ三つとハシゴすると、浩輝はへろへろになっていた。

「ヒロの苦手なもの、初めて見た！」

笑いながら美帆が言う。

「うるせえ！」

やっこの思いの笑顔で答える。

その後はレストランでランチを食べたり、ゲームセンターで射的をしたり。

ただ、ある方向へは美帆は足を向けなかった。

浩輝はそれを察した。

「さあ、美帆。次行こうか！」

「ヤダ！」

気配を察知して、美帆がしゃがみ込んで反抗する。

そんな美帆をお姫様抱っこすると、浩輝は走り出した。

「こらー！離せー！」

そのままお化け屋敷へと拉致した。

案の定美帆はお化け屋敷は苦手だったようで、浩輝の袖を掴んだまま殆ど目を開けずに、しかしキャーキャー叫びながら出口まで向かった。

お化け屋敷を出ると、美帆は半ベソ状態で

「ひどい・・・。」

と少し放心状態だった。

「ゴメンゴメン。でもお返しだよ。」

まだムクLER美帆に、浩輝は観覧車を指さした。

「さあ、あれに乗ろう。」

「うん。」

美帆は浩輝に引っ張られて観覧車へ向かった。

ここの観覧車はさほど大きくはない。

観覧車に乗ると、乗客は二人だけだった。

観覧車が上に向かう途中、営業時間終了の放送が流れた。

「これ降りたら終わりだね。」

美帆が寂しそうに呟く。

「うん。」

浩輝が答えると、美帆が浩輝の方に腰掛けた。

ゴンドラが傾く。

下を見ると、家路に就く客の流れが見えた。

「遊園地の終わりってなんだか寂しいね・・・。」

浩輝の肩に顔を預けながら美帆が言う。

「うん。」

美帆の肩を抱く。

「でも、明日にはまた賑やかになるよ。」

肩に回した手に力を込める。

「うん。」

美帆は力を抜いて体を預けた。

観覧車を降りて歩き出すと、次々と施設の明かりが消えていく。時計を見るとすでに16時を回っていた。

すでに夕暮れが迫り、空を紫色に染めていた。

出口に向かって歩いていたふたり。

ふと浩輝が足を止めた。

「どうしたの？」

繋いでいた手をぎゅっと握りしめた。

「美帆、見てごらん。」

浩輝が指をさした方向を見ると、古い回転木馬があった。

他の遊園地のような派手さは無いが、無性に懐かしみを感じる回転木馬だった。

「これは、100年以上前にアメリカで作られたメリーゴーランド。エルドラドっていうんだ。」

「へえ。」

「アル・カポネも乗ったことがあるらしい。」

その装飾の豪華さに美帆は目を奪われていた。

「素敵・・・。」

美帆がそう呟いた瞬間、その回転木馬に灯りが点った。

「エッ？」

一瞬でそのエルドラドはおとぎの世界へと変貌した。

「さあ、乗るよ！」

美帆の手を引いてエルドラドへ向かう。

「いいの？」

「ああ。」

そう言いながら、浩輝は運転席に座る初老の運転員に軽く一礼をした。

美帆がハワイに行っている間に、浩輝が園長に掛け合ってお願いを

していたのだった。

すべての事情を話しての直訴に、園長は善処を約束してくれた。
馬車に美帆を乗せると、浩輝はその横の馬に跨った。

「俺、このエルドラドが大好きで、いつか美帆を乗せたいって思ってたんだ。」

そう言い終わるやいなや、発車のベルが鳴り、木馬は静かに動き始めた。

笑顔の弾ける、たった二人の客を乗せた回転木馬が回り始めた。

暗闇に浮かび上がるその姿はまさに威風堂々たる姿だった。

その夜は病院の近くの高層ホテルに宿を取っていた。

ホテルのレストランでディナーを楽しみ、そのまま36階の部屋に入る。

「ヒロ。今日はありがとう。」

「いえいえ、どういたしまして。」

畏まったような浩輝の物言いに

「もう！ちゃんと・・・。」

言いかける美帆の唇を塞ぐ。

美帆の体から力が抜ける。

長いキスの後、浩輝が言葉をかける。

「またひとつ、夢が叶った！」

微笑む浩輝に

「次の夢は何？」

と美帆が訪ねる。

「美帆とずっと一緒にいること！」

見つめ合い、再び唇を重ねた。

その夜、再びふたりは結ばれた。

しかしこの時、浩輝は美帆の空咳に気付いていた。

「肺に転移が認められました。」

神山医師がそう切り出した。

静まる説明室。

今日は浩輝も一緒だった。

浩輝が公一に直訴して同席させてもらっていた。

空咳の件は、合流してすぐ公一達に報告してあった。

覚悟はしていたが、やはり辛い宣告だった。

「これから・・・どうなるんですか？」

浩輝が切り出した。

この子は本当に強い子だと、公一は思った。

「もう少し進行すると、痛みや喀血が予想されます。」

「そうなった場合・・・。」

浩輝が尋ねると神山医師は言葉を続けた。

「一気に病状が悪化し、死に至る場合があります。」

「・・・。」

全員が押し黙ったままだった。

その気配を察し、神山は語った。

「喀血等、症状が悪化した場合は入院もやむを得ないでしょう。痛みをコントロールしなければなりません。しかし・・・。」

神山はレントゲンを片付けながら続ける。

「まだこれほど元気なのはある意味奇跡ですよ。」

そういうと神山は立ち上がり一礼して部屋を出ていった。

しばらく沈黙が続いた。

そして浩輝は立ち上がり、部屋を出ようとする。

「浩輝君・・・。」

「美帆のところにいきます。」

「君は……。」

公一は言葉にならなかった。

「お父さん達は落ち着いたら来てください。」

「……。」

「僕は……。」

ドアノブに手をかける。

「僕の役目は、美帆のそばにいる事だけですから。」
そう言うのと部屋を出ていった。

その姿に公一は勇気をもらった。

こうすると決めた以上、美帆には嘘を突き通すしかないのだ。
由美子を見ると、力強く頷いている。

きつと自分と同じ思いに至ったのだろうと公一は思った。

「行こう。美帆が待ってる。」

「ええ。浩輝くんもね。」

ふたりは立ち上がった。

病室に美帆を迎えに行くと、ふたりは笑って話をしていた。

「どうしたの？ 楽しそうね。」

由美子が訪ねる。

「うん。今月の31日はヒロの誕生日なの。だから、私はヒロより
9ヶ月お姉さんだよ！ って」

「……馬鹿にするんです。」

浩輝が拗ねた口調で言う。

「あら、じゃあお祝いしないとね。」

「いえ、そんな大袈裟にされても……。」

公一が口を挟む。

「よし、うちでパーティーをしよう。」

「賛成！！」

美帆が嬉しそうに相槌を打つ。

「照れくさいなあ・・・。」

美帆が叱るように言う。

「あら、大事な人が生まれてくれた事を祝う日なんだから、ちゃんと来るのよ!」

「はいはい。」

観念したように、浩輝は苦笑いしながら答えた。

「じゃあ、その日は駅で待ち合わせね。私プレゼント買いに行くから。」

「了解!」

それからしばらく、穏やかな日々が続いた。

3学期が始まり、お互い学校に通いながら帰り道是一緒に美帆の家に向かう。

1時間ほど美帆の部屋で過ごした。

美帆の体調は変わりなかった。

本当に美帆は病魔に侵されているのだろうかと思えるほど平穏な日々だった。

相変わらず、美帆はよく笑いよくしゃべる。

ある日美帆に呼び出されて喫茶店に入ると、美帆の同級生に取り囲まれた。

女子高の生徒たちは恋愛に興味津津である。

しかも高校でも美人の誉れ高い美帆の恋人である。

どこで、どういう風に出会ったのだの、デートはどこへ行ったのだの、ファーストキスを説明しろだなどと、散々質問攻めにあった。

口ごもって美帆に助けを求めると、美帆も困った顔をしながら手を合わせて「ゴメン」と呟いていた。

どうやら美帆は学校でも人気者だったようだ。

そして浩輝の誕生日の当日を迎えた。

日曜日の朝だった。

「うん。大宮の豆の木の前で5時に待ち合わせね!」

そう言って電話を切った美帆は続けて由美子に話しかける。

「お母さん。6時頃帰ってくるから準備よろしくね!」

「はいはい。気を付けて行ってらっしゃい!」

キッチンの向こうから声だけ聞こえる。

「本当に送って行かなくていいのか?」

公一がコーヒークップを置いて尋ねる。

「うん。なんだか今日は歩きたいんだ!」

そう言うと美帆は玄関へ向かった。

「行ってきます!」

元気な声を残して出ていった。

そのまま駅まで30分ほど、美帆は歩いた。

風は冷たかったが、心地よい冷たさだった。

今日はこのまま何をして大丈夫だと思えるほど体調が良かった。

そのまま駅ビルに着くと、5階のアクセサリーショップへ向かう。

以前から浩輝へのプレゼントは決まっていた。

店に入ると、美帆は真っ直ぐ目当ての物に向かい手に取るとレジに向かった。

「これください!」

「贈り物ですか?」

「はい。誕生日用にラッピングしてください。」

ラッピングを待つ間も、渡した時の浩輝の顔が思い浮かび笑顔がこぼれる。

それを見た店員が美帆に尋ねる。

「恋人?」

「はい。とっても大切な人です！」

美帆はさらに嬉しそうに答えた。

「じゃあこれはサービス！」

と言うと、店員はリボンを豪華なものに変更した。

「わあ、ありがとうございます！」

プレゼントを受け取ると、そのまま待ち合わせ場所に向かった。

時計を見ると、待ち合わせ時間の3分前。

「やばーい、遅れちゃう！」

コンコースのある2階までエスカレーターで降りると、足早に待ち合わせの豆の木へ歩き出した。プレゼントを渡した時の浩輝の笑顔を想像して、なおも足早になった。

店舗を出てコンコースへ向かう。

ここを曲がれば豆の木はもうすぐだ。

ふいに美帆の足から力が抜けた。。

血の気が引いていく。

咳がこみ上げてくる。

「ゴホッ!!」

口を手で塞ぐ。

手の平に生温かさが伝わってきた。

手を口から離す。

「ヒロ・・・。」

目の前が真っ暗になった。

「おかしいな……。」

豆の木の前で浩輝は美帆を待っていた。

時計を見ると5時を5分ほど過ぎていた。

美帆は今まで一度も遅刻なんてしたことがなかった。

浩輝は不安になって美帆の家に連絡をしようと公衆電話を探した。

階段横に公衆電話を見つけ、電話に向かった。

近付いて行くと、その横の方に人だかりが出来ていた。

「おい、誰か救急車を呼んで！」

と誰かが叫んでいた。

誰かが倒れたようだ。

浩輝は足を止めた。

浩輝はその人だかりに向かった。

「……。」

声にならないうめき声を発した。

その真ん中にいたのは美帆だった。

口から血を吹いて倒れていた。

「美帆！！」

浩輝は慌てて人混みをかき分け、美帆の元にたどり着いた。

「美帆！美帆！」

抱き起こして名前を呼ぶが、答えない。

美帆の右手には吐いた血が付いていた。

思わず握りしめた美帆の右手は冷たかった。

「あまり激しく動かさない方がいい。今救急車が来る。」

誰かが声を掛けてくれたが、耳に入らない。

そのまま美帆を抱きしめ続けた。

遠くからサイレンが聞こえてきた。

美帆の左手には、プレゼントの袋がしっかりと握りしめられたままだった。

病室で、浩輝は美帆の手を握っていた。

美帆は市内の救急病院に運ばれた。

公一達も浩輝から連絡を受け、今ドクターと話をしている。

酸素吸入器を付けた美帆の胸は苦しげに上下している。

何もしてやれない自分がもどかしかった。

「浩輝君。」

ふいに呼ばれて振り返ると、病室の入り口に公一夫婦が立っていた。どうやら病室では出来ない話のようだった。

3人は1階に降りて、誰もいなくなった受付ロビーのベンチに腰掛けた。

公一が缶コーヒーを手渡す。

「ありがとうございます。」

浩輝は受け取ったコーヒーを手でもてあそんでいた。

「大変だったろう。浩輝君がいてくれてよかった・・・。」

「いえ。大丈夫です。」

見ると、浩輝のシャツの胸の部分が美帆の血で染まっていた。しばらく無言が続く。

「明日・・・。」

公一が口を開いた。

「明日大学病院に転院させる。」

「・・・そうですか。」

浩輝は缶コーヒーを開け、一気に飲み干した。

「今日はもう上がってくれ。美帆は今夜は眠ったままらしい。我々も今夜は家に戻る。」

「はい。」

浩輝は力無く立ち上がると、病院から出ていった。

それを見届けると公一達も家路に就いた。

自宅に戻り、リビングの灯りを着ける。

本来ならば今頃、浩輝の誕生日を祝っているはずだった。
ダイニングテーブルにはその準備がされたままだった。

公一はイスに腰掛けると、そのまま頭を抱えた。

病院の医師の話によると、今すぐ命の危険が迫っているわけではないとの事だった。

咯血のショックと重度の貧血で意識を失ったのだろう。

しかし、覚悟していた事とはいえ、血だらけの娘を見てしまったショックは大きかった。

「あなた・・・。」

キッチンから由美子が声を掛ける。

「うん？」

「お食事に行きましょう。」

由美子がビーフシチューを運んでくる。

昼間に美帆が作っていたシチューだ。

「ちゃんと食べておかないと、私たちがダウンしちゃいますよ。」

「・・・そうだな。」

公一はシチューに口を付けた。

由美子のシチューの味に近かった。

ふと、浩輝や美帆と4人で誕生日を祝っている幻が見えた気がした。
涙が溢れてくる。

こういう時、男親は弱いものだ。

泣きながらシチューを啜った。

由美子は話しかけることなく、公一の正面に座りシチューに口をつける。

その夜は静かな夜だった。

次の日、美帆の病室に向かうと美帆は笑顔で迎えてくれた。

「前の病気の後遺症だって。ビックリしちゃった！」

舌を出しながらおどけて言う。

「お父さんだってビックリしたぞ！」

美帆の頭をクシャクシャ撫でながら公一は言う。

「辛いところ無い？」

「うん。」

由美子が尋ねると、美帆は笑顔で答えた。

そのまま転院手続きを済ませ、大学病院が手配してくれた搬送車に乗り、医師立ち会いで大学病院へ向かった。

病院に着くと神山が出迎えてくれた。

「美帆ちゃん。なかなか派手にやっちゃったみたいだね？」

車椅子に乗り換えた美帆に神山がおどけて尋ねると

「すいません。みんなに心配掛けちゃって。」

明るく答えた。

「そっか。じゃあパッと検査して、あとはゆっくり休もうか。」

「はい。」

車椅子を押しながら、神山は後ろの公一達に目配せする。

公一達は一礼した。

一通り検査を済ませ、病室に美帆が帰ってくるとそのまま由美子を残し、浩一は説明室へ向かった。

中に入ると神山はいつものようにシャウカステインにCTやMRIの画像を挟み、待っていた。

「大変でしたね。」

着席を促しながら神山が言う。

「いえ、私たちより美帆の彼氏が大変だったみたいで。」

「そうですか。」

公一の着席を待って、カルテを広げた神山は切り出した。

「前もお話したように、肺へ転移したガンによるものです。」

「そうですか・・・。」

神山は眼鏡を指で上げながら

「喀血が起きた。あとはこのまま悪くなるだけです。まだ現状を続けられますか？」

「というと？」

「通常でしたらこのまま入院していただいて終末医療を行いますが、続けられるのでしたら一度退院していただいていいでしょう。しかし・・・。」

「しかし？」

「痛みが出てきた時点で再入院していただきます。」

「・・・そうですか・・・。」

公一は拳を強く握った。

「お願いします。」

神山は軽くため息をつきながら、話を続けた。

「では3日後に退院しましょう。ですが学校は休んでください。あくまでも自宅療養ということ。」

「はい。」

「それと、あまり長距離の旅行などは控えてください。」

「はい。」

「それと・・・。」

公一は顔を上げて神山を見つめる。

「強い痛みが出た場合、鎮痛剤では痛みは取れません。そのときはモルヒネを投与します。即入院させてください。」

美帆の最期が迫っているということだ。

覚悟はしているつもりだったが、後頭部がやけに重く感じられる。

「わかりました。」

吹っ切ったように力強く公一は答えた。

病室に戻ると、由美子と美帆が楽しそうに話をしていた。
美帆が公一を見つける。

「お父さん！」

笑顔で迎えてくれる。

「だいぶ良さそうだな？ 3日したら退院だって。」

「ホント？」

「ああ。でもしばらく自宅療養。学校もお休み。」

「えー！」

不服そうな顔をして美帆が反抗する。

「それとも入院したままがいいかい？」

「それは・・・。」

不満顔のままペコリとお辞儀をして

「自宅療養でお願いします。」

「いい子だ。」

そう言って公一は美帆の頭を撫でた。

その日のうちに由美子には話をした。

浩輝には電話をして、退院してから見舞いに来てくれるよう頼んだ。

これからあと何日、美帆を見守ってやれるのだろうか。

美帆の死へのカタチを整えてやらないといけなかった。

そして、どこまで美帆に嘘を付き続けられるのか。

短くて長い日々が続く。

大学病院を退院して、美帆が自宅に戻ってきた。

その翌日、浩輝が美帆の見舞いに訪れた。

美帆の部屋に上がると、美帆は勉強机のイスに腰掛けていた。

「寝てなくていいのか？」

ガラスのテーブルの前に座りながら、心配そうに浩輝が尋ねる。

「そんなに重病じゃないよ！」

そう言うと、美帆も浩輝の正面に座った。

「ヒロ……ごめんね。」

「ん？」

「ヒロの誕生日だったのに……。」

自分の体より、浩輝の誕生日を気にしていた。

「ぜんぜん。美帆が無事なのが何よりだよ。」

そう答えると美帆はホッとしたように息をついた。

「……ありがとね。」

「何が？」

「救急車でずっと……手を握っててくれてたでしょ？」

「ああ……。」

意識が無かった筈なのに。

「よく覚えてないんだけど、ヒロの手の温かさはわかってたんだ。」

「そう……なのか？」

「うん。だから、不安じゃ無かったよ！」

笑顔で答える。

美帆が一層愛おしく思えた。

「ねえ。」

「うん？」

美帆は机の上から包みを取り出した。

細長い箱はラッピングされ、豪華なりボンが付いていた。

「5日遅れでゴメンね。」

浩輝は受け取ると

「開けていい？」

「うん。」

浩輝は包みを開ける。

中には細長い化粧箱が入っている。

「開けてみて！」

美帆が嬉しそうに言う。

開いてみると中にはペンダントが入っていた。

金色の鎖にヘッドは水晶のペンタグラム。

「へえ、綺麗だな。」

取り出してしげしげと見る。

「着けてみて。」

浩輝はたじろいだ。

ペンダントなんか着けたことがない。

それでも悪戦苦闘する。

あたふたする浩輝を見て、美帆は笑った。

「もう、貸して！着けてあげるから。」

そう言うとき美帆は立ち上がり、浩輝の正面にひざまづいた。

浩輝からペンダントを受け取ると、美帆は浩輝の首に手を回してペンダントを着けた。

着け終わると同時に、浩輝は美帆を抱きしめた。

美帆は驚いたが、そのまま浩輝に身を預けた。

「美帆。ありがとな！」

「うん。」

そう言うとき、美帆は浩輝の顔を下から見上げながら

「誕生日おめでとう！」

そのまま軽くキスをした。

「ねえ、ほら。お揃いなんだよ！」

浩輝の胸の中で、美帆は自分の首に掛かるペンダントを持ち上げた。そこには浩輝と同じペンタグラムが光っていた。

「ホントだ。お揃い二つ目だな。」

浩輝は自分の左手の薬指にはまっている指輪を親指で弾いて見せた。
「うん。ヒロとはなんでも一緒！」

そのまま美帆は浩輝の胸に顔を埋めた。

「そして何でも半分づつな。」

「え？」

美帆の体をギュッと抱きしめた。

「嬉しい事も悲しい事も。」

「うん。」

「幸せもな。」

「うん。」

浩輝はもっと強く美帆を抱きしめた。

公一からの電話で、美帆の病気の進行は聞いていた。

元気そうに見えるが、胸に抱いた美帆が少し小さく、細く軽く感じられた。

美帆がぼそっと呟いた。

「水晶ってね、体の悪い気を吸い取ってくれるだけじゃなくて、願い事も叶えてくれるんだって。」

「へえ。凄いね。」

このペンダントが美帆の病気も治してくれたらいいのに・・・。

「じゃあ、美帆の誕生日に何かお返ししなきゃね。」

「え？」

「4月3日だったろ？」

「うん。」

「何がいい？」

美帆は考え込む。

「ほら、何？」

「そんなに簡単に思い浮かばないよ。」
頬を膨らまして反論する。

「じゃあおまかせ？」

「うん。ヒロと一緒にいられれば何でもいい！」

美帆の笑顔が弾けた。

浩輝は美帆の見舞いに毎日訪れた。

いつも笑顔で迎えてくれる美帆は、しかしながら日に日に弱っているように感じられた。

だんだんベッドの上で出迎える事も多くなってきた。

浩輝がいない時、美帆はたまに遠くを見つめ、何か考え込むような事が多くなったように由美子は感じていた。

3月に入って少し経った頃、その日は唐突にやってきた。

大学病院で診察を待っている時だった。

由美子が受付を済ませて美帆の元へ戻ってきた時、美帆がベンチにうずくまっていた。

「美帆！どうしたの？」

由美子は慌てて美帆の元に駆け寄り、美帆の肩を掴んだ。

美帆は由美子の腕を強い力で掴んだ。

「お母さん・・・お腹が・・・痛い・・・。」

顔色が真っ青になり、ガタガタ震えている。

そのまま力が抜けるように崩れ落ちていった。

「美帆！美帆！！」

「どうしました？」

看護師が駆け寄ってくる。

「お願い、先生を！」

由美子は泣きながら哀願した。

その騒ぎを感じながら、美帆は意識を失っていった。

美帆が倒れたその日のうちに、美帆へのモルヒネ投与による終末期医療が開始された。

神山の話によると、もういつ多臓器不全を起こし死に至ってもおかしくないという。

浩輝も駆けつけたが、もう前の状態ではなかった。

浩輝は黙って美帆の手を握っている。

美帆は浩輝の顔を見て微笑むが、その笑みは弱々しかった。いざその状態になると、以外と心が座っているもんだと公一は思った。

少し美帆の容態が持ち直し、小康状態に落ち着いた頃だった。

「お父さん……。」

横で眠ろうとしていた公一に美帆が声を掛けた。

「どうした？痛むのか？」

公一は起き上がり、美帆の髪の毛を優しく撫でながら聞いた。

「お父さん。お願いがあるの。」

「美帆のお願いなら何でも聞くぞ！」

微笑みながら答える。

「ありがとう……。あのね……。」

とても穏やかな声だった。

「ねえ、ヒロ。鎌倉の海に行きたい。」

そう言われて浩輝は戸惑った。

外出出来るようには思えなかった。

「大丈夫。先生の許可はもらったから！」

浩輝は不安げに公一を振り返る。

公一は答えずに黙って頷いた。

そして、ふたりは鎌倉へ向かう電車の中にいた。

隣に座る美帆は、いつものように浩輝の肩に頭を預けている。

前と違うのは、美帆の唇に引かれたルージュの色が濃いことだった。そのままでは唇の青さが目立ってしまうので、由美子が引いてくれていた。

鎌倉駅に着くと、タクシーを拾い、そのまま由比ヶ浜を目指した。

タクシーを降りて砂浜へ向かう。

そして以前、ファーストキスをした階段に腰掛けた。

3月とはいえ風が冷たかった。

浩輝は持ってきた毛布を美帆の肩に掛けた。

「大丈夫か？」

「うん。ありがと・・・。」

美帆は微笑むと、浩輝の手を握りしめ、そのまま海に視線を移した。

浩輝も海を見つめた。

穏やかな波が打ち寄せていた。

そのまま長い時間、ふたりはそのまま佇んでいた。

「ヒロ……。」

美帆は海を見つめたまま浩輝の名前を呼んだ。

「なに？」

美帆は浩輝の手を強く握りしめた。

「人間って、何のために生まれてくるのかな？」

浩輝はハツとして美帆の顔を見つめた。

その顔はまるでこの海のように穏やかな表情だった。

美帆は何かを悟っているような気がした。

「それは……。」

浩輝には答えが出せなかった。

そんなことを考えたこともなかった。

美帆は不意に浩輝に顔を向け、微笑んだ。

その表情は少し寂しそうに見えた。

「ありがとう……。ヒロ……。ごめんね……。」

笑顔のまま、美帆は続けた。

「しばらくヒロに会えない。」

「え？」

浩輝は絶句した。

「どうして？」

美帆は表情を崩さないまま答える。

「こんな弱っちい私を見て欲しくない。だから……。」

ニツコリ微笑む美帆。

「私が元気になったら会いに来て！」

「そんな事出来るわけ……。」

「お願い！」

美帆が叫んだ。

「お願いだから……。」

美帆は下を向いた。

「美帆……。」

少しして美帆が立ち上がった。

浩輝はその姿を見上げていた。

「じゃあね。」

美帆は明るく微笑むと、車道に向かって歩きだした。

「美帆！」

浩輝は立ち上がって追いかけると、後ろから美帆を力いっぱい抱きしめた。

「ヒロ！」

美帆は後ろを振り返り、浩輝の唇に素早くキスをした。

「その時まで、バイバイ！」

もう一度浩輝の頬にキスをすると、車道に向かって歩いていった。

浩輝は追いかけれなかった。

そのまま美帆を見送っていると、そこには公一が立っていた。

公一は厳しい表情で頷いた。

美帆はそのまま公一の車に乗り、走り去った。

病院へ向かって車を走らせていると、後部座席からすすり泣きが聞

こえてきた。

やがてそれは鳴咽に変わり、やがて美帆は声を上げて泣いた。
公一は黙ってそれを見守りながら、車を走らせた。

浩輝は、美帆の残していった毛布を頭から被ると、そのまま階段に
腰掛けた。

そのまま朝までずっと、波の音を聞き続けた。

その時はやがて静かに訪れた。

あの鎌倉での別れから2週間後の4月2日。
その日の夜、浩輝の家の電話が鳴った。
公一から、美帆の危篤の知らせだった。

浩輝は病院へ向かった。

夜の11時過ぎに病院に着いた。

見慣れた病室に入ると、公一と由美子が迎えてくれた。
ベッドの美帆を見る。

腕には点滴のチューブが何本も繋がり、胸からは心電図のコードが延びている。

あの別れの時とあまり変わらない姿が、まだまだ救いだった。

病室は静かだった。

心電図モニターの、美帆の心臓の鼓動を知らせる音と、酸素マスク越しの美帆の息づかいのみが聞こえていた。

「浩輝君・・・。」

公一が美帆の横に座るように促した。
黙って頷き、浩輝は美帆の枕元のイスに座った。

「朝から意識が無いの・・・。」

由美子が涙ぐみながら言う。

「そうですか・・・。」

美帆の端正な横顔を見つめたまま、浩輝は答えた。

規則正しく上下する美帆の胸元には、お揃いの水晶のペンダントが輝いていた。

「美帆・・・。」

美帆の髪の毛を撫でながら、静かに名前を呼んだ。

その時、うっすらと美帆の目が開いた。

「美帆！」

公一と由美子が叫んだ。

公一はとっさにナースコールを押した。

「美帆。」

浩輝が再び静かに名前を呼んだ。

美帆は、顔を浩輝に向けると優しく微笑んだ。

「ヒロ・・・。」

浩輝の目の前の布団が盛り上がる。

それを察した浩輝は、布団の中から美帆の右手を取り出し両手で握りしめた。

「俺はここにいるよ。」

優しく声を掛けた。

神山とナースたちが駆けつけた。

心電図をのぞき込んだ神山は、公一たちに向かって静かに頷いた。

そのまま、美帆の酸素マスクを優しく外した。

「ヒロ。」

再び美帆が呼んだ。

「なに？」

「来てくれたの？」

「ああ。」

浩輝は片手で美帆の手を握ったまま、もう片方の手でポケットを探り、ルージュを取り出した。

「もう少ししたら美帆の誕生日だろ！美帆に似合いそうなルージュをプレゼントしようと思って。」

浩輝は片手で器用にふたを外すと、美帆の目の前に持っていた。

「ほら、綺麗なピンク色だろ？」

美帆はそこに視線を移す。

「ホントだ……。」

しかし目の焦点は合わない。

「ありがと。」

美帆は再び浩輝に視線を移す。

「ねえ、ヒロ……。」

「なんだ？」

涙が溢れそうになるのを必死に堪えながら答える。

「私ね……ヒロと出会ってからの一年は、私の人生の中で一番幸せだったよ……。」

「うん。」

「ヒロの事を想うだけで……幸せになれた。」

「うん。」

「だから……私はずっと幸せなままだよ……。」

浩輝は強く美帆の手を握りしめた。

「当たり前だ！俺は美帆のすべてなんだからな！」

堪えきれずに溢れる涙を流しながら、浩輝は答えた。

「うん。」

嬉しそうに微笑む美帆。

そして顔を反対側に向ける。

「お父さん。お母さん。」

公一と由美子は美帆の頭を撫でた。

「なに？」

由美子が返事をする。

「私・・・幸せだったよ・・・。」

「うん。」

「お父さんと・・・お母さんの子供で・・・良かった。」

またニツコリ微笑んだ。

もうふたりとも涙が止まらなかった。

「美帆・・・。」

由美子が優しく美帆の髪を掻きあげた。

美帆は再び浩輝の方へ向き直った。

「ヒロ・・・。」

だんだん声が弱くなる。

「ん？」

美帆の視線が定まらなくなった。

「ヒロ・・・。大好きだよ・・・。」

そのまま美帆は静かに目を閉じた。

そして、その1時間後、山崎美帆は静かに、眠る様に穏やかに息を引き取った。

17歳になったばかりだった。

4月3日 午前1時05分。
美帆の人生に幕が下りた。

手続きを済ませ、遺体搬送車に美帆が乗せられた時は夜が明けていた。

浩輝が公一の車に向かうと、病院の庭に咲く桜が満開だった。そのまま美帆は自宅へと戻った。

「お父さん。」

浩輝は公一に話しかけた。

「ん？」

「美帆のそばにいてもいいですか？」

「ああ。」

公一は頷いた。

公一も由美子もこれから葬儀の準備に追われるだろう。

浩輝がそばにいてくれるのは有り難かった。

「頼むよ。」

「ありがとうございます。」

浩輝は深々とお辞儀をすると、美帆の待つ部屋へ向かった。

1階の和室に、美帆は横たえられていた。

すでに白い布団が掛けられ、白い打掛と守り刀が乗せられていた。

美帆の横に座る。

美帆の体に乗せられたドライアイスの冷気がひんやりと漂ってくる。美帆がいなくなったなんて、まだ夢のようだった。

そのまま浩輝は横になった。

知らず知らずのうちに、浩輝は眠りに落ちた。

公一が部屋を覗くと、浩輝が美帆の遺体の横で眠っていた。

公一は声を掛けることが出来ずに部屋を後にした。

夢を見た。

「ヒロ！」

美帆の声だ。

「ヒロ！」

また聞こえた。

「美帆？」

声を掛けようとするが、なぜか体が動かない。
声も出ない。

「ヒロ。こんな所で寝ちゃって！」

美帆の匂いがした。

「風邪引いちゃうぞ！」

体が暖かくなった。

「大好きだよ！」

美帆の息が頬をすり抜けた様な気がした。

しばらくして目が覚めた。

「ん・・・？」

浩輝の体に、美帆に掛かっていた白い打掛がかかっていた。

「美帆？」

慌てて美帆を見るが、美帆は動かなかった。

浩輝は静かに微笑んで、内掛けを美帆に掛け直した。

「浩輝君。」

由美子がやってきた。

「業者さんが来たの。これからお化粧して納棺だって。」

浩輝は由美子に声をかけた。

「お母さん。」

「なに？」

浩輝は続けた。

「美帆のルージュ、僕に引かせてもらえませんか？」

「・・・。」

由美子は昨夜の光景を思い出した。

「うん。わかった。」

由美子は笑顔で答えた。

「ありがとうございます。」

葬祭業者の女性スタッフの手で、美帆は湯灌をして着替えをし、髪型を整え、死化粧を施された。

「浩輝くん！」

由美子に呼ばれて、浩輝は部屋に入った。

美帆はまるで眠っているかのようだった。

「さあ、お願い。」

由美子に促されて、浩輝は美帆の枕元に座った。

浩輝がポケットからルージュを取り出すと、由美子が筆を渡した。

浩輝はルージュを回して先を出すと、筆に付けて美帆の唇に塗り付けていく。

血の気を失った美帆の唇が、鮮やかなピンク色に染まっていく。

「どうですか？」

塗り終わると、由美子に確認してもらった。

「うん。大丈夫。綺麗だわ。」

答えると、由美子はそのまま部屋を出ていった。

それを見届けて、浩輝は美帆の鮮やかな唇に軽く唇を重ねた。

納棺も終わり、美帆は葬儀場へ。

浩輝は一旦帰宅して葬儀参列の準備をしようと思った。

公一に告げると、そのままいてくれるように言われた。

幸いなことに公一と浩輝の体格は近かったので、そのまま礼服を借りた。

「浩輝君。」

入浴をさせてもらい、身支度を整えていると公一が声を掛けてきた。

「はい。」

ネクタイがうまく締められない。

公一は浩輝のネクタイを直してやりながら言った。

「君は親族席にいてくれないか。」

「いいんですか？」

公一は頷いた。

「美帆もそれを望んでいるだろう。」

浩輝は頷いた。

夜。

美帆の通夜は盛大に行われた。

美帆の親族が続々と集まり、公一たちの元で肩を抱き合っていた。

美帆の同級生たちも大挙してやってきた。

みんな目を泣き腫らしていた。

美帆がどんなに多くの人たちに愛されていたのかを思い知らされた。

式が進みお経が流れる中、親族席の一番後ろに座っていた浩輝は、

祭壇で微笑む美帆の写真を見つめていた。

4人でキャンプをしたときの写真だった。

弾ける笑顔だった。

まだ浩輝は泣けなかった。

お通夜も終わり、浩輝はそのまま、ここにいさせてくれるように頼んだ。

公一たちは快く許してくれた。

公一たちは親族と控え室で精進落としの酒盛りをしていた。

浩輝はその騒ぎの中に入りたくなかった。

葬儀場に並んだイスの最前列に座り、線香の番をしながら美帆の遺影を見つめていた。

その下の棺の中には美帆が眠っている。

なんだか不思議な感覚に囚われていた。

気配がして後ろを振り向くと、公一が立っていた。

赤い顔をしていた。

浩輝が一礼をすると、公一が近寄ってきた。

「ご苦労さん。」

そう言って浩輝に湯呑み茶碗を差し出す。

浩輝が受け取ると、公一は持っていた一升瓶から日本酒を注いだ。

自分の湯呑みにも酒を注ぐと、公一は美帆の遺影に向かって湯呑みを掲げた。

「献杯！」

浩輝も真似をした。

ふたりは目を合わせると一気に飲み干した。

一気に胃が焼けるように熱くなる。

「プハッ！」

一息入れると、公一は再びお互いの湯呑みに酒を注いだ。

今度はそれをチビチビと嘗めるように飲む。

やおら公一はボヤクように話し出した。

「しっかしなあ、最後の言葉がヒロ！だからなあ。」

「すいません・・・。」

「いや・・・。」

公一は続けた。

「いいんだ。君にはその権利がある。」

そう言うと、公一はその場に土下座した。

「君には辛い事をお願いしてしまった。申し訳ない。」

浩輝は慌てて湯呑みを置き、公一を起こした。

「とんでもない。」

公一は顔を上げた。

その目は少し潤んでいた。

「僕はとても感謝してます。」

そのまま無言で見つめあった。

美帆を愛し抜いた二人が見つめあった。

もう言葉にならなかった。

公一は立ち上がって懷に手をやった。

「浩輝君。」

「はい。」

浩輝も立ち上がった。

「これを・・・。」

その手には封筒があった。

「病院で美帆の私物を整理していたら、引き出しの本の間にこれが挟んであった。」

浩輝は受け取ると

「これは？」

公一が続ける。

「うん。私たち両親宛と、君宛の二通があった。」

表を見ると、見慣れた文字で「遠山浩輝様」と書かれていた。

「じゃあ。」

そう言って公一は控え室に引き上げて行った。

浩輝はまだ、その封を切る気になれなかった。
湯呑みを再び飲み干した。

胃が焼けるようだった。

控え室で公一と飲んでいた親族も宿へと引き上げ、由美子と公一は一息ついていた。

由美子が公一へお茶を差し出す。

「ありがとう。」

そう言って、公一は湯呑みに口を付けた。

先程、浩輝には美帆からの手紙を渡してきたが、自分たちへの手紙も忙しい中読めてはいなかった。

胸ポケットから取り出すと、由美子に目をやった。

由美子は黙って頷いた。

封を開ける。

静かな室内に紙ズレの音だけが響いた。

おそらく、亡くなる直前に書いたのだろう。

弱々しい字だった。

「お父さん、お母さんへ。」

優しい嘘をありがとう。

私、山崎美帆はふたりの娘で幸せでした。

また、ふたりの子供に生まれてくるから、その時はよろしくお願いします。

お母さん。

お料理を教えてくださいありがとうございます。

おかげで私の大好きな人にお料理を作ってあげることができました。

いつもお話を聞いてくれてありがとうございます。

おかげで私は私自身の幸せを確認することができました。

いつも優しい笑顔をありがとうございます。

おかげで私はいつも優しい気持ちでいられました。

お父さん。

いつも大きな愛で包んでくれてありがとうございます。

おかげで私も愛がたくさんの娘になりました。

ヨットを教えてくださいありがとうございます。

おかげで海が大好きになりました。

ヒロとのこと、許してくれてありがとうございます。

おかげで私は人を心の底から愛することを知りました。

お父さん、お母さん。

素敵な名前をありがとうございます。

自分の名前が大好きでした。

そして、この時代に私を生んでくれてありがとうございます。

おかげで私は世界で一番幸せでした。

話したいことはいっぱいあるけれど、便箋が足りなくなっちゃうか

ら、このへんで……。

大好きな私のお父さんお母さんへ。

美帆より」

公一は読み終えた手紙を由美子に渡す。

由美子が手紙を読みながら嗚咽する。

最後まで美帆にはガンだとは言わなかった。

しかし、美帆が自分の命に期限があることを知っている事には気付いていた。

美帆は最後まで、自分たちの嘘に付き合ってくれていた。

由美子は手紙を読み終えて、封筒に便箋をしまった。

「強い子だったんですね……。」

由美子が涙を拭いながら言った。

「ああ。私たちが思っていた以上にね。」

そう言って、公一はお茶を飲み干した。

「美帆の様子を見に行くか。」

由美子を促すと、美帆の眠る葬祭場へと向かった。

葬祭場に入ろうとすると、浩輝の姿が見えなかった。

祭壇の線香はまだしっかり残っている。

線香番をちゃんと果たしていたようだ。

「あなた……。」

由美子が何かに気付いて立ち止まり、小声で話しかけた。

公一は由美子の視線の先を見た。

浩輝が美帆の棺の横に腰掛けていた。

棺の中の美帆の髪の毛を撫でていた。

その浩輝の表情はとても穏やかだった。

ふたりはそこから歩を進めることが出来なかった。

その瞬間、その場所には優しさと悲しみが充満していた。

美帆の告別式は、通夜よりも盛大だった。

式は滞りなく終わり、いよいよ火葬場へと運ばれることになった。

閉棺。

参列者が美帆の亡骸に花を手向けていく。

あちこちで啜り泣きが聞こえてきた。

浩輝はそれを遠巻きに眺めていた。

なんとなく不思議な気分だった。

「浩輝君。」

公一が声を掛けるが、浩輝は首を振って遠慮した。

頷きながら、公一が近寄ってくる。

「指輪とペンダントは入れられないそうなんだ。どうする？」

浩輝は無表情のまま答えた。

「もし許されるなら、美帆と一緒にお墓に入れてやってください。」

「・・・わかった。」

公一も無表情のまま答えて、その場を離れた。

美帆の棺に釘が打たれていく。

浩輝はそのまま立ち尽くしていた。

そして、美帆の棺は親族の男性たちの手で運ばれていった。

公一の喪主挨拶は素晴らしかった。
参列したほとんどの人が涙を流した。

やがて出棺を迎えた。

浩輝が公一に近付く。

「お父さん。」

遺影を抱えた公一が振り向いた。

「すみません。俺、ここで待っていていいですか？」

公一は一瞬驚いた様な顔をした。

「いいのかい？」

「はい。」

「・・・わかった。」

美帆が焼かれる所に立ち会いたくなかった。

浩輝の気持ちを察した公一は、浩輝に微笑むと車に乗り込んだ。

やがて霊柩車はクラクションを鳴らす。

その音は悲しげに春の青空に響き渡った。

葬祭場のすぐ横に、満開の桜で溢れる公園があった。

浩輝はそのベンチを見つけ、腰掛けた。

しばらくそこで佇んでいた。

やがて意を決したように、胸ポケットに手をやると美帆からの手紙を取り出した。

「ヒロ。」

ごめんね。一緒にいられなくて。

お父さんたちと一緒に、嘘に付き合ってくれてありがとう。

でも、私は弱っていく自分の姿をヒロに見られなくなかった。
だから・・・ごめんなさい。

私ね、初めてヒロを見た時、ヒロとずっと一緒にいたいと思ったんだ。

最初はあるな出会いしか出来なかったけど、話すきっかけが欲しかった。

でも、そんな私をヒロは見つけてくれた。

嬉しかった・・・。

ヒロが大好きだった。

ヒロの大きな手が大好きだった。

ヒロの笑顔が大好きだった。

ヒロの声が大好きだった。

ヒロの背中が大好きだった。

ヒロの・・・唇が大好きだった。

書ききれないほど・・・ヒロの全てが大好きだった。

私はヒロにいっぱい幸せを貰いました。

これから私は、ヒロとは違う空の下に住みます。

その空は、どんなカタチをしているんだろう？

こことは違うカタチなのかな？

この空の下で、ヒロはいっぱい幸せになってください。

私はこの世界ではその役目が果たせなくなっちゃうけど、違う空の下でヒロの幸せを祈ってます。

だから、ヒロはちゃんと自分の幸せを見つけてね。

そして生まれ変わって、もしまだ私のことを覚えていてくれたら、私を見つけ出してね・・・。

その時までバイバイ！

大好きだよ！

美帆」

浩輝の目に涙が溢れた。
やっと泣けた。

手紙の最後の方には涙が滲んでいた。
きつと泣きながら書いたのだろう。
おそらく絶望の中にいたであろう美帆が、この手紙を書いた時の想いに浩輝は思いを馳せた。

そのまま浩輝は空を仰ぎ見た。

咲き乱れる桜の花は、まるで美帆の命のように儚く散り急いでいた。

車列が戻ってきたのを見て、浩輝は葬祭場に戻った。
そのまま初七日法要を行い、美帆の葬儀の全てが終了した。

礼服から着替え終えて、浩輝は公一たちに挨拶に向かった。

「一緒に行かないのかい？」

公一が尋ねた。

「いえ、ここで……。」

「そうか……。」

答えると、公一はポケットからガラスの小瓶を取り出し、浩輝に差し出した。

「これは？」

「美帆の遺骨の一部だよ。」

「……。」

小瓶を見てみると、中に白い欠片が一片入っていた。

「君に持っていて欲しい。君の好きにしてくれていい。君に任せるから。」

由美子を見ると、由美子も頷いている。

「わかりました。ありがとうございます。」

瓶をポケットにしまうと、公一が握手を求めてきた。

美帆を愛した二人の男が手を握りあう。

「いつか、大人になったら飲もうな。」

「はい。」

笑顔で言葉を交わす。

結びつけるものを失った両者は別れを告げた。

駅に向かう途中、再び先程の公園に立ち寄った。
桜を見上げながら、ポケットの中で握りしめていた小瓶を取り出した。

コルクの栓を開けると、浩輝は左手から指輪を外し、小瓶に入れて栓をした。

振ってみると、ガラスが小気味いい音を立てた。

浩輝は小瓶を再びポケットに突っ込むと、足早に駅へと向かった。

美帆がこの世を去って10年が過ぎた。

浩輝は大学へ進み、今は在学中に立ち上げたベンチャー企業を友人と共同経営している。

軌道に乗せるために忙しい毎日を送っていた。

毎年命日には美帆の墓を訪れた。

鎌倉の海を望む高台の墓地に美帆は眠っていた。

しかし、浩輝は海には近付かなかった。

公一たちには連絡を取らなかった。

会って、何を話していいのかがわからなかった。

恋もした。

だが大抵は長くは続かなかった。

付き合い始めてしばらくすると、必ず美帆と比べてしまう。半年もすると、相手の悪い所ばかりが気になってしまった。それは分が悪い。

何せ美帆は欠点が見えてこないのだ。

ある意味、浩輝にとって美帆は女神になっていた。

そして、浩輝はずっと考えていた。

あの鎌倉の海で美帆が聞いてきた問いの答えを。

「人間って、何のために生まれてくるのかな？」

今でも美帆の声が鮮やかに甦ってくる。

しかし、答えはわからずじまいだった。

その問いに考えを巡らせる度に、浩輝は煙草に手を伸ばした。

「こら！」

神社の境内で煙草を口にくわえて怒られた。

声の主は森山亜弓という3歳下の後輩だった。

今の会社は大学の同級生の森山裕太と立ち上げたのだが、亜弓はその妹だ。

今は会社を手伝ってくれている同僚だ。

裕太もなかなかのイケメンだったが、亜弓はそれ以上に整った顔をしていた。

大学では陰のミスキャンパスだと評判だった。

今日は裕太の子供のお宮参りで神社に来ていた。

「神社の境内は禁煙ですよ！」

「あ、そうか。」

浩輝は慌てて煙草をしまった。

亜弓が好意を持ってくれているのは感じていたが、またいつもの二の舞になるのも困るし、何より親友の妹だ。

浩輝としても好意は持っていたが、それ以上は進めなかった。

「おいおい、少しはゆっくり行ってくれよ。」

裕太が妻を伴って社殿から出てきた。

腕には子供が抱かれている。

「まだまだ首が座ってないんだからな。」

裕太にそっくりな女の子だ。

自分に似た可愛い娘と豪語している。

「どうも雰囲気は馴染めないんだよ。」

「おまえにはどうも」祝ってやろう”という心が感じられん！」

裕太が軽口を叩く。

「悪かったな！」

浩輝が返す。

軽口を叩き合える、いい親友だった。

「そうだ。お札貰ってくるから、浩輝ちょっと抱いててくれ。」

「おいおい。」

いきなり子供を預けられた。

片手で座りが悪かったので、右手で赤ちゃんの肩の下に手を回そうとした瞬間、赤ちゃんが浩輝の人差し指を握ってきた。

物凄く強い力だった。

電流に打たれたような感覚が走った。

「そうそう。そのまま幸せを手放しちゃダメよ！また見つけるの大変なんだから！」

赤ちゃんをあやしながら亜弓が言った。

「え？」

亜弓は浩輝に振り返って答えた。

「赤ちゃんは、その手に幸せを握り締めて生まれて来るんです。で

も手を開いて逃がしちゃうから、その幸せを探し続けるんです。」

「・・・それは？」

問いかける浩輝に、亜弓は笑顔で答えた。

「昔、何かの本かマンガで読んだセリフです。」

「・・・そうか・・・。」

放心したような浩輝を、亜弓は不思議そうに見つめていた。

「悪い悪い！」

お札を持って裕太が帰ってきた。

「お・・・おう。」

赤ん坊を裕太の腕に返す。

そのままボーツとする浩輝の顔を裕太が覗き込む。

「どうした？」

「・・・。」

「おい！」

声を掛けられてハッと我に返る。

「大丈夫か？」

「あ・・・ああ。」

平静を取り繕うのが精一杯だった。

その後、裕太の自宅でお祝いをしたが、どこか上の空だった。

夕方の帰り道。

駅まで亜弓と一緒にだった。

「何かあったんですか？」

「ん？」

顔を向けると亜弓が浩輝の顔を覗き込んでいる。

「なんか今日ずっとボーツとしてるから。」

なんだか見透かされているような気がした。

「何でもないよ。ちょっと仕事のこと。」

「だったらいいんですけど……。」

本気で心配してくれているのがわかる。

「うん。心配してくれてありがとう。」

笑顔で答えると、亜弓も笑顔になった。

駅で亜弓を見送ると、浩輝は携帯を取り出した。

今でも覚えていた番号だった。

「もしもし……。」

「……浩輝君かい？」

懐かしい声が聞こえてきた。

「ご無沙汰してすみません。」

「いや。しかし元気そうだ。」

「お父さん。今夜お暇ですか？」

そのまま待ち合わせをして、大宮へ向かう。

駅の近くの焼鳥屋に入ると、懐かしい顔がカウンターに座っていた。

「よう！」

「お久しぶりです。」

浩輝は公一に頭を下げた。

少し髪の毛に白髪が増えたが、あまり変わってないように見えた。

「立派になったな。」

「いえ、まだまだです。」

浩輝は公一の隣に腰掛けた。

ふたりはビールで乾杯した。

今までの身の上を話した。

公一は嬉しそうに聞いていた。

酒が日本酒に変わり、話に花が咲いた。

「そういえば、お母さんは？」

浩輝が尋ねた。

「ああ。」

公一は浩輝のお猪口に酒を注ぎながら

「あの後、女房は小児ガン病棟のケアセンターに勤めだしてね。今は子供たちのカウンセラーをしてるよ。」

そのまま自分のお猪口に手酌した酒を煽る。

「終わり次第ここに来るよ。」

「そうですか・・・。」

由美子も色々思うところがあつたのだろう。

「今度ね、ここを引き払おうと思って。」

公一が突然切り出した。

「え？」

「仕事を引退して、鎌倉の家に戻ろうと思う。」

「そうですか・・・。」

鎌倉の家を思い出した。

「懐かしいですね。」

「ああ。」

公一は再び酒を煽った。

「吹っ切れたんだろう？」

「え？」

「だから、会いに来てくれたんだろう？」

浩輝は少し考えて、笑顔で返した。

「はい。昔の約束も思い出しましたし。」

「そうか。」

公一は遠い目で懐かしむ。

大人になったら飲もうという約束を覚えていてくれたことが嬉しかった。

「でも・・・、まだわからないんです。」

「ん？」

「本当に吹っ切れたのかどうか。今でも美帆が大好きです。それは変わらない。」

「うん。」

「でも、今のままの俺を見て、美帆は喜ばないと思うんです。」

「そうか。」

浩輝は真っ直ぐ前を見て、意を決した様に口を開く。

「それを確認しに、行ってきます。」

公一は嬉しそうに聞いている。

「そうか。でもたまには鎌倉に遊びに来いよ！美帆の思い出話で酒が飲める、女房以外の唯一の相手だからな！」

「ありがとうございます。」

浩輝は素直に頭を下げた。

店の引き戸が開いて店員の威勢のいいかけ声が響くと、そこには笑顔の由美子が立っていた。

浩輝は時間が戻った様な気がした。

9月の由比ヶ浜は、喧噪も終わり穏やかだった。

浩輝は穏やかな海に向かって流木に腰掛け佇んでいた。

「ごめんな、美帆。10年掛かったよ。」

水面が太陽に照らされてキラキラと輝いている。

「美帆に出された問題、やっと答えが出たよ。」

海面の光の輝きが美帆の微笑みのように思えた。

「君も喜んでくれるの？」

ふと風が吹いて、浩輝の頬をすり抜けた。

「答えを伝えに来た。でももう少しこのままでいたいな。」

吹き抜ける風はまだ優しくかった。

「どうして人は生まれて来るんだろう？君はそう言ったね。」
爽やかな風が頬を撫でる。

「人は、幸せを探すために生まれてくるんじゃないかな？」
浩輝は問いかける。

「幸せを探して、苦しんで、苦しんで、苦しみ抜く。」
一言一言噛みしめるように語り掛ける。

「だから、見つかったときは嬉しいし、今度はそれを守るためにま

た苦しむ。」

浩輝は自分の言葉に頷く。

「でも、その苦しみが幸せなんだ。だから人は生きていける。」
また、風が浩輝の周りをすり抜けた。

「間違ってるかもしれないけど、俺はそう思う。」

ポケットからガラスの小瓶を取り出した。

「美帆！君の住む空のカタチは、ここと同じかい？」

浩輝はしばらく小瓶を見詰めていた。

やがて踏ん切りがついたのか、小瓶を持って、浩輝は波打ち際に向かった。

そのまま小瓶を波打ち際に置いた。

寄せた波が、小瓶を海へ連れ去った。

それを見つめながら、浩輝は呟いた。

「いつかきつと、君を見つけるよ。君の住む空の下で。」

海を見つめながら、浩輝は煙草を啜えた。
火を着けて深く息を吸い込む。
吐き出した煙が空に消えて行った。

「こら！」

くわえていた煙草を急に取り上げられた。

「!？」

振り向くと、微笑む顔があった。

（美帆・・・!？）

陽射しの中で亜弓が笑っていた。

「健康に悪いんだから煙草は止めなさい！」

いつのまにか迎えに来ていたらしい。
車道では裕太が手を振っている。

「わかったよ。」

振り返って亜弓に笑いかけた。

「行こう！」

亜弓が浩輝の手を取って先導する。

歩きだした瞬間、美帆の声が聞こえた気がした。

「ありがとう……。」

優しい風が浩輝の横を通り過ぎた。

24 (後書き)

庄司陽子先生

デニーズ春日部店

M・Yさん

に捧げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1068t/>

君の住む空のカタチ

2011年11月13日11時49分発行